

Presented by Stardust Books

創星

Vol. 9

Take Free

Presented by Stardust Books

創星

Vol. 9

Take Free



目次

- 2 春になれば 鳩山豆子
- 3 当たり前 詠人不知
- 4 意味は溶けていく 馬場貴生
- 8 ネコが好きただけなんだよ… マチコ・リバーウォーク
- 9 あるカフェの話 坪井希
- 14 賢者のおくりもの(下) しなおかななし
- 28 第9回 サブカル対談 一路真実×鳩山豆子
- 35 第7回 クラシック教養のお時間 天沼太郎
- 39 鈴木孝道の苦悩 一路真実
- 50 Philosophy of Stardustbooks
- 51 編集後記

表紙担当・・・To's job

* 短歌十首

春になれば



鳩山 豆子

おじさんとおじさんとおじさんの区別ができるようになる春になれば

スピッツを好きな心をひた隠し営業成績積み上げる夏

人の話を聞きなさいって助言さえ聞かずに小鳥課長は生きる

黙々と小さな点を打っているこのおじさんは味わい深い

右の胸に名刺を入れて憧れは大事なものです今もそうです

元気ですと素直に言えるようになり季節を感じる身体に変わる

10才差年上よりも年下が恐ろしいことラスカル世代

義理チョコは禁止にします本命は目をつぶるのでがんばりなさい

挙手をして本当のことを言いなさい大人は嘘についてよいのか

小鳥課長の胸に小さな自負があるためらいながら傷つきながら



当たり前前

よみびと知らず
詠人不知

当たり前だと思っていた。当たり前だと。つまり、当たる前||当たっていない||はずれだと。

私は、はずれだと思っていたんだ。

しかし、はずれである事や物は、実ははずれではなく、与えられていたんだ。誰かの援助や犠牲、私の天性やら、なんやかんやひっくるめて、ラッキー。

ラ、ラ、ラッキーって…。

当たり前じゃねーかよ。はずれはずれぬかしながら、めっちゃ当たってやがる…。

じゃーさ、当たり前じゃなくてさ、当たり前でいいんでないの？

今、まさに当たりですよ。そんなの当たり前じゃん。バカな事をぬかすな、当たり前だろが。ねーねー、なんでこうなの？なんでもなんでも？ なんでもへったくれもない！ みんな、そうしてるだろ！ 当たり前だからだ！ 当たり前？
って事は当たり前だね(笑) 当たり前じゃない！ 当たり前だ！だからさ、パパ、当たり前前って事ははずれでしょ？ だけどラッキーだから当たり前なんだよ。だからみんながしてるのは当たり前なんだよ。みんながしてない事をするのがはずれなんだよ。外れてるって事なのかもね。お前はまた何を訳のわからぬ事をぬかしとんじや。当たりかははずれか知らんが、そんな事、どこで覚えてきたんだ？ 学校か？ 学校じゃないよ。えーつとなんか変な、なんとか知らずって人が書いてた。なんや、そのなんとか知らず？ っていうのは。しらすの種類かなんかか？ よく知らなくい。あんな、よく知らない人の変な事をうのみにするなど言ってるだろ！ そのしらす野郎がお前に何を言ったか知らんが、そんなのはウソっぱちだ。うのみにするんじやないぞ、そしてこんな事はママに言うんじやないぞ、わかったか？

わかったよ、言わないよ、そんなの当たり前じゃん。

(おわり)

意味は熔けていく 馬場貴生

妻はそれでも幸せだったかのように思える。

妻は一流商社に勤めるいわゆる「できる女」だった。

出会った時から仕事一筋で、私はそれが非常にカッコよく見えた。

なので、仕事でデートがつぶれたとしても、それを優先した。

時間はかかったが、妻は私を伴侶として認め、結婚に至った。

妻は生きる意味を仕事に求めている。

仕事をし、それに見合う給料をもらい、評価をもらうことが彼女の人生であったのだ。

ある春の日であった。

妻は倒れた。

病院でわめき散らす妻を今でも覚えている。

仕事ができないことが何よりもつらいのだ。

初めて彼女が泣く姿を見た。

しばらくの検査入院の末、ついに原因はわからなかった。

「何かあったらまた来てください」と言われ退院したが、彼女はすぐに職場に復帰。

しかし、また同じように倒れた。

さらに詳しい検査をしたが、やはり原因はわからずじまい。

自宅療養に切り替え、様子を見た。

妻はひどく落ち込んだ。

「人生が否定されたみたい」とよく口

走った。

自分の信じた道が、病気でとん挫するのはどれだけつらいだろうか。

自分にどれだけのことができるのかはわからないが、私は妻を支え続けようと誓った。

ある日、私が仕事から帰ると、妻が不機嫌な顔で報告してきた。

「何か変わるかと思って、散歩してみたの。ほら、気晴らしになるっていうじゃない。でも、意味が解らないの。目的もなく歩いて何が面白いの？」

「風景みたり、花を見たりするんだよ」

「ふーん……」

そっけなく彼女の返事が飛んでいった。

その夜、物音がして起きてみると、玄関が開いていて、彼女の姿がなかった。

恐る恐る外に出てみると、彼女が道の

真ん中に立っていた。

「どうしたの？」

「わかんない」

「家に入ろう」

「オキタクヒサ」

彼女が、よくわからない言葉を発した。

私は「何？」と聞き返した。

「オキタクヒサがね、もう、行っちゃ

ったのよ。サイラタクジャに」

「何言ってるの。オキタク何？ どこ

に行っちゃったって？」

彼女は、笑みを浮かべるだけで答えな

かった。

「寝よう」

「わかんないの？」

彼女は笑っていた。

この日から妻は私には理解できない言葉

を頻繁に発するようになった。

「モルモルケツケ」

「ヒザイクチャ？ ヒザイクチャかな」

「コ・パ・ケ」

私がどういう意味か聞いても、彼女は

何も答えてくれない。

彼女の意味不明な言動は日増しにひど

くなっていた。

私が何を聞いても笑うばかりではぐら

かすのである。

それはまるで、私が困惑するのを面白

がっているかのようなだった。

私は思わず聞いた。

「こういうの意味あるの？」

「意味なんて気にしてるの？」と彼女

から帰ってきて、私はさらに困惑した。

彼女は意味を求めて生きてきたはずで

ある。

彼女の言葉は、もはや意味を放棄して

いるかのように思えた。
まるで人が変わったようだ。

妻の実家から両親が見舞いに来た。

見た目には健康そのものの妻に対して、

両親は申し訳なさそうな顔をした。

「どこが悪いのかはわからんが、ちゃ

んと妻として家事とかはできるのだろ

う？」

「何でそんなこと言うの？」

病気をしてから初めて本気で不機嫌に

なる妻を見た。

「私は、どうなっても私よ。それでい

いじゃない」

その言葉に不服はない。

しかし、私の知っている妻の言う言葉

ではない。

妻は自分というものを明確にカテゴラ

イズし、ライフスタイルを決め、自分の指針に沿って生きる人であった。

「どうなっても私」なんて言うあいまいな表現は、妻の最も嫌悪する言葉だったはずだ。

妻の休息は長引き、ある日正式に退職となった。

しかし、彼女は落ち込む様子はなく、むしろ喜んでいる様子だった。私は違和感ばかり感じていた。

「君は、どうなりたいんだ？ 君は働くことで輝く女性だったはずだ」

ある日、私は彼女に直接訴えかけた。

「そんなこと誰が決めたの？ 病気になるって分かったのよ。私は自由なのよ。何の肩書がなくても、どうあったとしても私は私よ。もう、あなたの妻である必要もない。別に離婚したいわけじ

やないわ。ただ、婚姻という計式がなくても、あなたとは仲良くやっていくってだけ。名前もいらぬ。すべての意味は、私から消えてなくなればいいの」

私は困惑した。

人の姿をした彼女を見るのは、これが最後だった。

次の日、会社から帰ると彼女の姿はなかった。

代わりにベッドがぐしゃぐしゃに濡れていた。

私は彼女の気配が部屋にあるような気がして、家の中のすべての部屋を探したが、彼女はいなかった。

しかし、彼女は間違いなくこの部屋にいる。

確信があった。

私は、彼女が寝ていたベッドが気になった。

濡れたベッドはかすかに暖かい気がしたが、冷たい気もした。

その水分は、シートにしみているように見えたが、手ですくうと簡単に手に取ることができた。

私は、慈しむようにそれをコップに移した。

その水は水のようにもあり、違うようでもあった。

しかし、それは間違いなく妻であった。妻は全ての意味から解放されることを望み、その姿を変えた。

水は何日も腐るようなことはなく、コップの中で七色に光り、たゆたうでい

た。

私は、妻を愛していたが、どのように対応すればよいのか困惑していた。

そんな私をよそに、水面に波紋が走った。

まるで私を笑っているかのようだ。

「どうやって愛してくれるの？」と妻が言っているかのように思えた。

私は腹が立ち、妻を飲んだ。

妻は私の喉をぬるりと通り、五臓に入っていた。

しかし、後に残るものもなく、無味乾燥な気もした。

喉は潤うが、同時にひどく乾いた。

妻は水のようなだが、水ではない。

喉が潤えば水になってしまう。

妻はあくまで意味を否定した。

腹が痛くなり、私は妻を吐き出した。

妻はあくまで水のようなものとして私を笑った。

私は、妻を水としたから、妻は私に反抗した。

妻は私の愛を試している。

いや、それが愛という意味のあるものなのかもはや怪しい。

「僕は君をどうにもしないよ」と私は言った。

今度は満天の星が瞬いたかのように見えた。

妻は冒険をしている。

完全に無意味なものへと変貌を遂げようとしている。

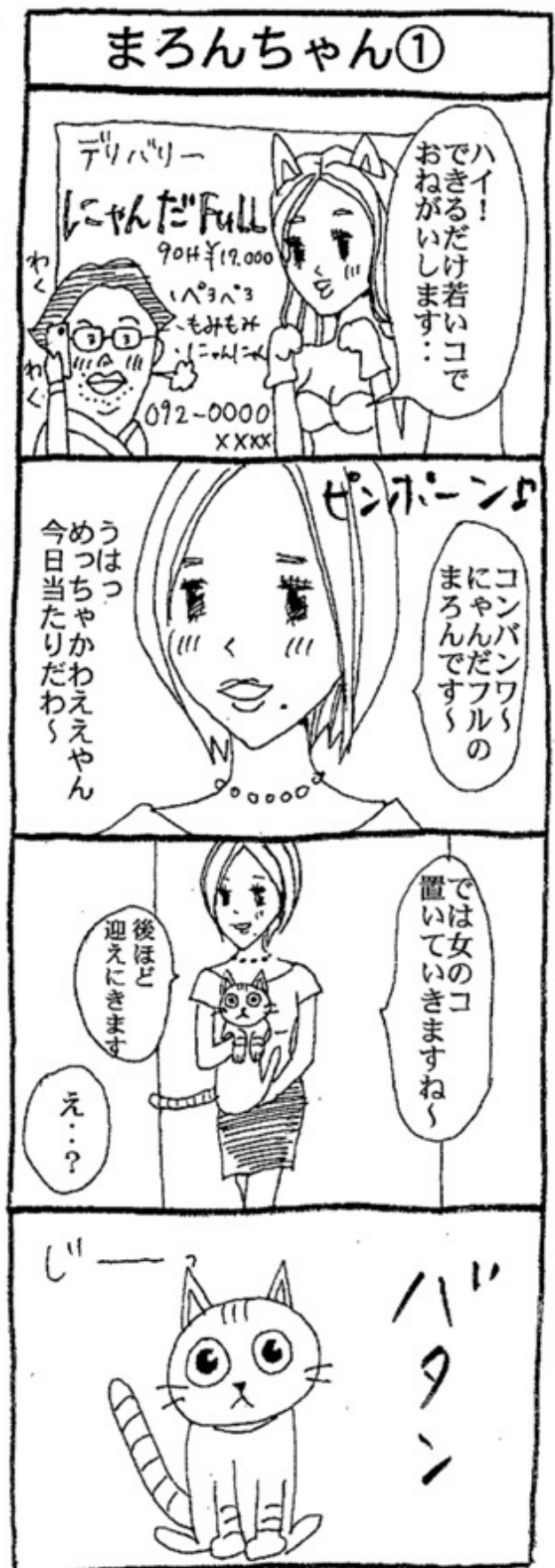
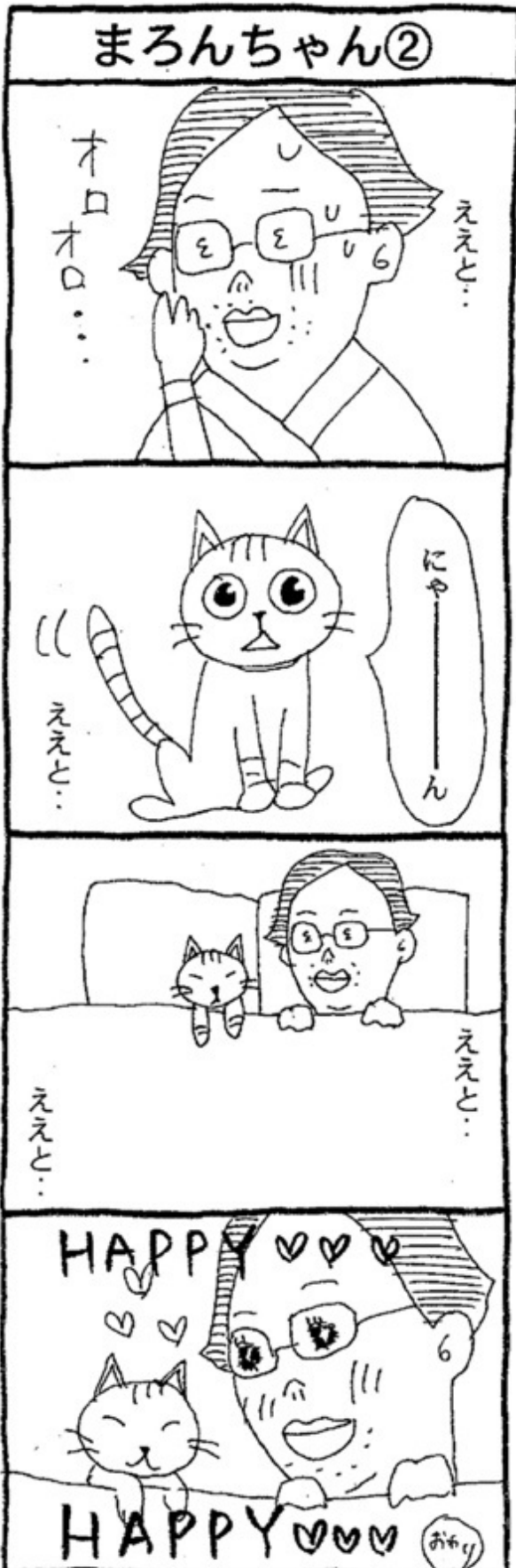
私は、妻が次に何になるのか楽しみである。

毎日、それを楽しみに家を出る。

外を歩いていると、花や、雲や、空や、いろんなものが笑ってくる。

完

ネコが好きただけなんだよ... マチコ・リバーウォーク



店の裏側には大きな竈があります。けれどパンを焼くためのものではありません。

パンだとかケーキだとかを焼くところは、ちゃんと厨房の隅におさまっていて、しかもそれなりに新しく見えるものでした。裏の竈は煉瓦造りで、とても立派なものだけれど、なんだか黒く煤けていました。細かいところはすつかりぼやけてしまいましたが、その煤け具合だけはよく覚えています。焦げ色だなあ、焼くとこたくさんだなあと見とれている幼い「わたし」を、店主はすぐに捕まえました。そのまま臙脂色の扉を開け、カウンターの上に「わたし」を座らせて、「もうこの場所へは来るんじゃないよ」と顔に皺を増やして言ったのでした。

それから何度も太陽は沈み、——私は今日、今までより少し大きな制服をもらいました

あるカフェーの話 坪井 希

空のてっぺんから降りてきた太陽が赤く色づくまでのひととき。とても短い時間だが、この店には客がいなくなる。カランコロンとひっきりなしに鳴っていた鐘も、今は微動だにせず扉に吊り下がっていた。

再び客が来る夜に備えて、私は丸テーブルを一つ一つ拭き、花瓶

の水を換えた。

昼間は二本足の客が来て、入り口そばに置いてあるパンやお菓子を買って帰っていく。日が沈んでからは、姿かたちの変わった客が、バーカウンターに並べられた瓶を物色する。そして大抵、今私が拭いているテーブルについた。彼らが硬貨を残して消える真夜中まで、私は休む暇がない。

昼の間は食べ物と並べ、お金とそれらを交換するだけでいいから楽だ。けれど、たまにパンを買った客から妙なことを聞かれるときがあった。「ガツコウはどうしているの」と気の毒そうに言われても、何のことだか分からない。

店主は「昼のお客さんが通う、もしくは通っていたところだよ」と言っていた。行きたいかい、と聞かれたが首を振った。生まれた家から母に連れてこられて以来、このカフェーから出たことはない。毎日毎日ここで寝て起き働いて過ごす、この生活が好きだった。

シヨウケースに並べられたパンはいつもいい匂いがしている。焼きたてをこっそり食べさせてもらったりもする。ガレットやダックワーズはとて甘く、さくつとしていて好きだから、お金と引き換えに渡すのが惜しい。三日に一度は、店主にもらったお小遣いはたいて自分で買うことにしている。

店主はたまに、「焼きすぎたから売り物に出来なくて」と言いながら、きれいに焼けたお菓子を出してくれる。私やノジカくんは淹れてもらった紅茶を飲みながら、ありがたくそれを「処分」させても

らうのだ。

母の遠い親戚であるという彼は、優しくいいひとだと思ふ。そして不思議なひとだった。朝から夜にかけて少しずつ老けていく。昼間は銀色だった髪が、店終いをする頃にはしなっとした灰色に変わっている。私はその色の移り変わりが、お菓子の次に好きだった。

この夜に向けての準備時間、店主はやつと厨房から出て来て、カウンターや戸棚の一番目立つところに硝子瓶を並べていく。私はテーブルを回りながら、その横顔や後ろ姿を眺めていつもにんまりしている。今の店主は、線の細い銀縁眼鏡がよく似合っていた。

リングデインドン、と鐘が鳴った。店主は屈めていた腰をゆるりと伸ばして、バーカウンターに戻っていった。

長靴下のハチキリさんがせかせか店に入ってくる。禿頭の上には水滴がつき、ふさふさした髪の毛の先は濡れてしおれていた。彼がいた外は雪なのかもしれない。

「やあやあや、マスター、あれはあるかね、五日前に預けたあれは」

ケースの戸を開け、ひよいひよいとパンをつまみ出しながらハチキリさんは尋ねた。店主は彼に出すミルクティーの準備をやめて、おや、と首を傾げる。

「出してる瓶は七日前ですよ。出来上がるにはあと二日かかりますが」

「なに小さいので構わないんだ、最大火力でいっちょ頼むよ。あれが欲しくて寄ったのだから」

ととん、とステッキを突いて跳ねるハチキリさんは、今日も靴下

をちぐはぐに履いていた。店主は困った風に眉を下けたけれど、何も言わず、カウンターの奥にある嚙脂色の扉から出て行った。店の裏にある竈に向かったのだろう。

待つてるよお、と上機嫌に手を振った後、ハチキリさんはトレーに山盛りのパンを乗せ、それを私が磨いたばかりのテーブルに置いた。

「こんばんはハチキリさん、今日もお洒落な靴下ですね」

「こんばんはヒバリちゃん、君こそ新しい蝶ネクタイが素敵じゃないか。そのベストも、スカートも」

「店主に新しいのをもらったんです。前のはもう小さすぎたから」

「そうだろうそうだろう、君も大きくなったから。一昔前は私と同じくらいの大きさで実に美味しそうだった」

まるまる肥えた顔を「うんうんうん」と上下に振って、ハチキリさんはパンを頬張っていく。

淹れかけのミルクティーをマグに注ぐ。店主に代わって、彼の前にことりと置いた。

「ありがとう。まったくここで出されるものは絶品だ。おかげで私はどんどん肥えてしまう」

「昼間のお客さんは飲み物を頼んでくれないんです。カウンターやここには寄り付かないで、パンだけ買って帰って行くの。うちはパン屋じゃなくカフェーなのに」

「そりゃあ君、連中はこの場所が見えていないのさ」

もったいないねえ、と言いながらハチキリさんは茶を啜った。

リングデインドン。鐘が鳴って、私は入口の方に飛んでいった。三本角を拭き拭きやってきたのは、赤ら顔の又ハさんと、一つ目のケダルマさん。又ハさんは「いつもの」と呟き、ケダルマさんはこくこく頷く。そして二人はハチキリさんを挟んで座った。

二人が注文した分に加えて、ミルクティーのおかわりも用意する。ふと見ると、ハチキリさんのトレーにはたった一個の丸パンしか残っていないかった。

やっとなって来た店主が、ハチキリさんに念を押す。
「本当に小さいですよ」

「いいよいいよ。やあ、マスターは融通を利かしてくれるから助かるね」

丸っこい手が紙ナプキンを剥ぎ取っていく。中から出てきたのは、飴玉より小さい真っ青な球体だった。それを摘まんでもてあそび、ハチキリさんは満足げに笑う。

今夜はいつもより客が来ない。丸テーブルにはだいぶ空きがあり、その分こちら側には余裕があった。雑用は先ほど全て済ませてしまったので、空いた身体はサーブスに使うことにする。店主の目配せを受けた私がビスコッティを持っていくと、皆に喜ばれた。

暫く経っているのに、ハチキリさんはまだ青玉を見ていた。それが食べ物であるだけ知っている私は、不思議に思っただけ声をかける。

「召し上がらないんですか」

「なんだかもったいなくってね。店にあるものも勿論いいけど、自分で選んだものは格別だから」

「選んだ？」

「そう、ちゃんと選んで拾って来たんだよ。私の目に狂いはないね。ほら、きれいだろう？」

「ええ」

あの煤けた竈から出てきたとは思えないほどその球体は透きとおり、つやつやと光っていた。ほんのわずかな光量で濃淡が変わる。ランプに照らして揺らしてみると、球体の奥で光の網が波打っていた。

ハチキリさんはほうと息をつき、髪を揺らす。

「あるとき海岸沿いを歩いていて幸運だった。もちろん見つけた時はひどいものだったけど、うまく燃やせばこんなに見目よくなるんだね。他にもたくさん転がっていたし、もつと拾ってくれば良かったか。……しかし私のこの身体じゃねえ」

水玉模様の靴下を穿いた右足と、縞々模様の左足を交互にべちべちと叩き、ハチキリさんは溜息をついた。大きすぎる革のブーツを悲しそうにぶらぶらと揺らす。

「せめてもう少し足が長けりゃいいんだが」

「でも、そのままのハチキリさんが素敵です」

やっとならぬ以外の言葉を返すことができた。夜のお客さんで口をきく人は、よくこの球体を話題にする。ほとんど何も知らない私は、話を振られたときにいつも困るのだった。

これが食べ物であり、美味しいらしいということは知っている。

たかさんの色があることも、夜のお客さんにしか出さないことも、それが竈から出てくるもので、店に出せる大きさになるまで七日間

かかることも知っている。球体の材料はお客さんが持つてくることもあるようだ……というのは、ハチキリさんを見ていて曖昧に学習した。

店主は一日のどこかで店を私やノジカくんに任せ、必ず臙脂色の扉を開けて外に出て行った。材料を取りに行くか、竈の様子を見ているのだと思う。私が気にするそぶりを見せると必ず厳しい顔をした。「好奇心が過ぎれば、どんなものだって死んでしまふんだよ」と。

この店で暮らし始めて随分経つが、あの竈と同じように、店主は球の材料を決して私に見せようとしなない。店で交わされる会話を盗み聞きしても、何も突き止めることはできなかった。

ノジカくんは何か知ってるのかな。

私がぼんやり考えたとき、入口の鐘がけたたましい音を立てた。

リングデインドン、リングデインデインドン。

扉の向こうに血まみれの、赤目の男が立っていた。

ちゃんとしているのは片足だけで、もう片方はズボンの丈が半分しかなく、そこから一本の棒が突き出ている。身につけた服はボロ同然に擦り切れ、古土の色をしていた。よく見ると、服についた血は既に乾いている。大半は、本人のものではないのかもしれない。

彼が平然としていたら、私も「また変わったお客さんだなあ」としか思わなかっただろう。外見も、発言も、目の前の男より突飛な客はいくらでもいた。

けれど男の顔面は蒼白で、さつきからがたと震えている。私は慌てて彼に駆け寄った。震えているお客さんにはお腹を満たす食

べ物と、温かい飲み物を。

ぼん、と肩を叩かれた。私を後ろに下がらせると、店主は低く優しい声で「接客に戻っておいで」と促す。びんと伸ばされた背中は、思ったより広い。

「ようこそいらつしやいませ。ご注文は」

「ここは、」

男はぜい、と息を吐き、扉に縋るようにして一歩だけ店に足を踏み入れた。彼の背後にはズダ袋が五つ、六つ、ぬかるんだ土に若干沈むような形で転がっていた。錆と腐敗物が混じったような匂いがここまで届く。

「ここは、これを……こいつらを」

「はい。お時間は七日いただきますが、宜しいですか」

男の言葉は切れ切れだったが、店主はその意図を確実に汲み取っていた。男の表情がわずかに緩む。

「七日、わかった。……頼むから、きれいにやってくれ」

「商品は代金と引き換えです。何かお入れするものは」

「こんなものしかないが」

ポケットから濡れた小袋を取り出し、男はそろそろと差し出した。店主は恭しくそれを受け取って、更に深く頭を下げる。

もう一度「頼むな」と言い添えて、男はよろめきながら背を向けた。ズダ袋を店の中に押し込み、扉を閉めようとする。

「何か少しでも召し上がられませんか」

「いや、持ち合わせがないから。お代も払えるか分からんよ」

血のこびりついた手で目元をぬぐう。

「もう戻って来れないかもしれないんだ」

「……では、これも差し上げておきます」

店主はベストの胸ポケットから何かを取り出し、男に握らせる。

彼の耳元に一度口を寄せ、それから優しく外へ送り出した。

リングデインドン。

扉が完全に閉まると、鼻が麻痺するほどの異臭はきれいさっぱり消えてしまった。店内に普段の空気が戻ってくる。店主はズダ袋を全て拾い上げると、バーカウンターの奥へ消えた。

「まったく丁寧な対応だ」

コーヒーを呷った又ハさんの言葉に、ケダルマさんは顔の真ん中についた目を大きくしばしばさせる。「同意」の意味だった。

新たに追加したパンをまた立て続けに頬張りながら、ハチキリさんはにやにやしている。

「ヒバリちゃんヒバリちゃん。あのマスターが何て言ったか聞いてたかい？」

「いいえ。ハチキリさんは聞こえてたんですか？」

「あの人はねえこう言ったんだよ。『いざという時はお飲み下さい。夜になれば、この店に来ていただくことが出来るようになります』ってさ。お菓ひとつを渡してね」

優しい人だね、とても優しい。ハチキリさんはけらけらっと笑って、ミルクティーを啜った。

「私が思うに彼はもう、ここに来ることはできないね。人であるこ

とをやめるのは、実はそんなに簡単じゃない。……彼の死体はできれば私が拾いたいものだ」

ハチキリさんは、べ、と大きな舌を出し、やっと青玉をそこに乗せた。からころ音をさせながら興味深そうに首を傾げる。

「海女はやっぱ海の色だったけど、しよっぱくはないんだねえ。汗と血と泥にまみれた兵隊さんはどういう風になるのかな」

カウンターの方で水音がした。店の裏から戻った店主は何度も何度も手を洗う。その表情は普段と同じだ。——けれど制服の袖口には泥がこびりつき、ところどころ赤く染まっている。

「美味しいものをたらふく食べて色んな場所を巡る僕は、ずっと此処で働いているヒヨリちゃんは、どんな味になるのかな。ねえ？」

私はようやく一つだけ、この店の秘密を知った気がした。

しなおかなし

どうしてなのかわからない。その少し前、微かに予兆のようなものはあった。穏やかだったはずのあいつの顔がなんだか落ち込んでほうっとして、元気がなさそうに見えたけど、でも、それでもまさか、そんなふうには壊れてしまうとは考えられなかった。

けど、それはどう見たとしても、とても正気と思えなかった。

やばかった。本当にやばかった。どれくらいやばいかっていったら、人間という生き物から、感情や理性、希望といったものを一切切奪い取ったら、こうなってしまうんじゃないかというぐらい、なにもかもが真っ黒で、何が一番やばいかって、そんな状態で普段通りに登校してくることが異常だった。

他のやつから見たら、それはいつもとそう変わらなかつたかもしれない。

教科書とノートを開いて授業を受け、休み時間には机に読み終えた本を置いたまま、ぼんやりと窓の外を眺め、時間通りに下校する。

それはごく当たり前で、いつも通りのはずなのに。

いつもと同じ行動は、まるでよく似た抜け殻が人の動きをなぞるみたいになんかこちなく、全く、心

がこもっていなかった。

それはどう見ても異常で、声をかけようとしたけれど、あいつはいつもにも増して、人を全く寄せ付けようとせず、誰かがほんの少し自分の近くに来ただけで、教室からその姿を消し、始業時間ギリギリになるまで戻ってこようとしなかった。

一人を好んではいても、あからさまには人を避けようとしてこなかったあいつのその行動は、それがよっぽどのことだと言っていたけれど、接触する機会はなく、また、そこまで深い心の傷に無遠慮に踏み込んでいいものかと、ほんの少しだけ躊躇わせて、なかなかあいつと話をすることができなかつた。

「向原くん」

あいつがおかしくなったその三日目。バスケット部の練習が終わった後、家庭科教師の深坂美登里に呼び止められた。

「なんですか」

この先生とはそれほど仲が悪くなかつたが、格別親しかったり、接点があつたわけでもない。授業でもないこのタイミングで呼び止められるような用事が自分にあるとは思えず、つい怪訝な顔をしてしまう。

そんなこつちを気にしているのかいないのか、深坂は眉を寄せて顔を曇らせ、おれにこつち尋ねて

きた。

「いきなりごめんね。あの、同じクラスの行方さん、最近何か変わったことあつた？」

突然出てきたその名前に、思わず少し目を見開く。どうしてあいつの名前が出てくるのか、そしてどうしておれにそれを尋ねるのか。不思議なことはたくさんあつたけど、それより先に口を開く。

「いえ。特に何も知らないですけど。先生、何かあつたんですか？」

普段の明るい雰囲気と違い、心配事を抱えているような様子と表情に、何か知っているのと勘が告げる。

尋ね返すと案の定、深坂は少し周囲を窺ってから、慎重に言葉を選んで説明する。

「うん……あのね。あの子今日、前に貸してた料理の本返しに来たの。卒業までに返せばいいって言ったのに。もう必要ないからって」

「……料理の本って、あいつ、そんなの借りてたんですか」

「うん。行方さん、最近すごく熱心で、興味あるみたいだったから」

あいつが深坂とそれほど親しかったとは知らなかつたが、そんなことは別にいい。問題なのは、その続きだ。

「必要なくなつたって、なんで」

深坂の口ぶりだと、それは一生懸命読んでいる

なら二日や三日で返すようなものじゃないんだらう。

それ実際に、卒業間際まで借りていいと言われたのに、もしつい最近借りたのなら、こんなタイミングで返すというのは、あいつにしては早すぎる。あいつ、本はいつもぎりぎりまで借りてきていたはずなのに。

「わからない。ただ、もう使わなくなかったからって、その本部屋に置いて、そのまま、ふらっと教室出て行って。それで」

そこで、何か大事なことを思案するように、深坂が言葉を詰まらせる。歯切れの悪いその台詞は、ひどくよくないことを告げるのを戸惑っているようだった。

「それで？」

先を促す。何を戸惑っているかは知らないが、もしよくないことなら、余計に早く聞かないと意味が無い。急かすようにじっと睨まれ、深坂は意を決したように口にする。

「ずっとお世話になりました、って。あんまりいい生徒じゃなかったかもしれないけど、ありがと」「さいましたって。あの子、最後にそう言ったの」

なんだかひどく不安げな顔のまま、深坂はそんなことを言った。

「ねえ。やっぱり、おかしいでしょ。だってまだ卒

業まで二ヶ月以上あるし、私の受け持ちの授業だって、今日が最後なわけじゃないのに」

ずっとお世話になりました。

それは、まるで。

「すみません。ちょっと、失礼します」

まだ何か言いたそうにしていた深坂に背を向け、廊下を蹴って走り出す。

時刻は五時過ぎ。部活も委員会も終わり、校内に人の姿はほとんどない。今日は職員会議があつて、それが終わってしまう頃には日誌を書き上げ提出しろと、帰りの会で担任は日直に向けて言っていた。

今ならあいつはきつと、いつもと同じ場所にいる。

じわりと浮かぶ嫌な予感を振り切るように、おれはそこへ向かつて、誰もいない廊下を全力で駆け抜けた。

校舎の西側。二階の奥の突き当たり。三年一組と書かれたその扉を、力まかせに開け放つ。

「向原、くん？」

教室の隅、窓際一番後ろのその席に、行方は一人で座っていた。

机の上にもあるはずの本はなく、開かれた古

い黒い表紙の日誌と、小さくなった消しゴムだけが転がっていた。

驚いているのか、いないのか。鉛筆を握りしめたまま、行方は書き込んでいたページから、おれへとゆっくり視線を移す。

おれは肩からスポーツバッグを提げたまま、その傍らへと歩み寄る。

電灯も点けず、窓から差し込む色を失いかけた夕暮れを、ほのかに浴びる白いシャツ。

それはまるで、何か大事なものがぶつんと切れた人形みたいに、ひどく虚ろな目をしていた。

「……なに？」

あの日、生きているのが楽しいと、笑っていたのが嘘みたいに、前よりもっと感情のない顔で、平板な声が返ってくる。

「お前さ、どうしたの？」

できるだけ不自然にならないように、いつもと同じ声で問いかける。

「……なにが？」

いったい何を訊かれているのか、わからないというように、ゆっくりと首を傾げる。その仕草がひどく痛々しく、思わず目を背けそうになる身体を力の限り抑えつけた。

「……二二二と、ずっと様子おかしいじゃん。

なんか、嫌なことでもあったのか？」

陳腐な言い方だと思っただけど、それ以上うまい表現がみつからず、思ったままを口にする。

「ううん。べつに、なんともない」

明らかになんともなくないので、あいつは表情一つ変えることなく、静かにそれを否定する。

「うそつけ。だって」

お前、今にも死にそうな顔してる。そう言いかけて踏み止まる。

おれは一度言いかけたことを途中でやめることなくめったにない。

でも、どうしてかわからないけれど、そのとき、もしそれを言ってしまったら、あいつが本当に死んでしまいそうな気がしていた。

「……向原くんは、優しいね」

唐突に、あいつはそんなことを言う。

優しいと言われるのなんて初めてで、場違いだとは思いつながら、そんなことないと、口を開こうと思つたら。

「向原くんは優しいから、わたしなんかといっしょにいたらいけないんだよ」

突然言われたその台詞に、一瞬、思考が停止する。

こいつ。今、一体なんて言った？

「わたしね、たぶん、もうすぐ転校する」

おれのことなど気にせず、行方は静かに言葉

を続けていく。

「まだ、はつきりしてないけど。おとうさんとおかあさん、たぶん、もうすぐ離婚する。そしたら、どっちになるかわからないけど、もしおかあさんのほうに行ったら、引越して、しないといけないでしょ」

そうなんだ、とは言わなかった。親の離婚。それはとてもショックな出来事で、大変だなと、普通のやつなら慰めるべきことなのに。どうしてか、何も言葉が出てこなかった。ガラス球のような目で口を開くあいつの言葉が、どこか遠くに聞こえていた。

「おとうさん、わたしがいないほうが、もっと好きに生きられるし。おかあさん、わたしがいっしょにいたほうが、いっぱいお金もらえるから。だから……うん。たぶん、もうすぐいなくなる」

小さな子供に説明するように。自分に言い聞かせるように、行方は、とつとつと言葉を並べていく。

それは親が離婚することの悲しみより、事実を確認し、飲み込むために反芻しているだけの行為のようだった。

そんなことが、理由なのか。ほつりと、胸に疑念が沸き起る。

お前から感情を奪い取ったのは、たつたそれだけのことなのか。

どうしてか、淡々と述べられた説明を事実と受

け止めながら、それが全てではないだろうと、問いただしたい自分がいた。問いただしたいのに、その一言が出てこられない自分がいた。

「だから優しくしてくれても、わたし、なんにもしてあげられない」

そう言ったあいつの表情は、さっきと少しも変わっていないはずなのに。

それはまるでナイフで胸を抉るみたいに悲痛な顔と声だった。

「向原くんが優しくても、わたし、なんにも返してあげられない。いっぱい優しくしてもらっても、わたし、なんにもできないから」

なんにもしてあげられなくてごめん。

なんにも残してやれないと、一人にしてしまつてすまない。おれを抱きしめてそう言った、泣き腫らした目と、ぼろぼろに掠れて擦り切れた声が蘇る。

「だから、向原くんは、わたしのこと、もう、気にしないでいいんだよ。これ以上、わたしのこと、優しくしないでいいんだよ」

今までどうもありがとう。まるでそれが別れのように、借りていた大事なものを返して去ってい

つたと、深坂が言っていた言葉を思い出す。

「わたし、ちゃんといなくなるから。ちゃんと、ひとりでないから」

まるでなんでもないことみたいに。なんとということのないように。なにかも押し殺し奪いつくした空っぽの声で、あいつは、そんな言葉を口にする。

なんだよ、それ。

「……黙れよ」

開いた口からこぼれた声は、自分でも、びっくりするほど低かった。

「お前、なんでそんなにしゃべるんだよ。べらべらべらべら、さつきから、うっとうしいことばっか言いやがって」

低く押し殺すような昏い声。相手を気遣うものとは程遠い、一歩間違えば殺意すら感じられるそれを、喉の奥から絞り出す。

おまえ、つらいことあったんだろ。かなしくてかなしくてくるしくて、息をするのもいやになるぐらい、すくつらいことあったんだろ。なのに、なんで。

わたしのこと、もう気にしないでいいんだよ。

「勝手なこと言っただけじゃねえよ！返せないから

なんにもしないでいいだ？ふざけんな！返してもらうこといちいち考えて、話しかけたりなんかするか馬鹿！」

ひどく乱暴な声が出る。おれのことを優しいと、そう言ったあいつを否定するように、凶暴な言葉が口を突く。やめると頭のどこかが言ってるのに、身体の底から沸き上がってくる、腹が煮えるような怒りと苛立ちを、力任せに叩きつける。

笑わないことが気になった。いじめられているわけでもないのに人を避け、窓辺で空を一人眺めるその姿をいつも気にして見つめていて、それがわからないように、数え切れないほどの女と付き合った。

初めて笑うところを見た。生きてるのが楽しいのかと尋ねたおれに、あまりよくわからないけれど、それでも今は楽しいと、気を悪くすることもなく答え、胸の大きな女が好きだと思っていたと、ずれた反応を返されて、ガキみたいに拗ねていたおれに、おれのそういうところは嫌いじゃないと、どこかおかしそうに笑っていて、釈然としなかったけど、初めて見せたその笑顔に、本当はすごくほっとした。

陽の沈みかけた飼育小屋。脳裏に焼きついたその仕草。動かなくなつたウサギの子供の屍骸をを何度も撫でるその手つきを、誰より優しく寂しいと思っていた。

「なんだよ、ちゃんといなくなるって！ちゃんとい

なくなるって、なんなんだよ！おまえ」

眼球が湯を注いだように熱い。歯が折れそうなほど食いしばり、指が白くなるほど握つた手のひらに爪を立て、目の前のひとのかたちを睨みつけ、鳴り響く警鐘を振り切つて。

「一人で勝手に消えようとしたりするんじゃないよ！」

おれは、最後の一言を口にした。

行方は動かない。ぜんまいが切れた人形みたいに、指一つびくりと震わすこともなく、ただ、殴りつけるようなおれの言葉を浴びている。

紙のように白く生気の抜けた肌。折れそうなほど細い腕。感情のない虚ろな瞳。陽の暮れかけた教室に沈んでしまふような顔。

そこから。

ぼたりと、涙が一筋こぼれ落ちる。

頬に伝い、細いあごから膝に置かれた左手に落ちるその粒に、行方はゆっくり指で触れ、その手を顔へと持ち上げ、頬へ伸ばす。

どうして涙が出ているのか、わからないとでもいうように、大きく開かれた両目から、開きっぱなしだった日誌のページに、ぼたぼた雫が降りそそぐ。

生まれて初めて、自分が泣かせた女の顔を凝視

する。

「……最悪だ。感情まかせに女を泣かせるよ
うなやつは男の風上にも置けないと、あれだけき
つく教えられたのに。自己嫌悪に陥りながら、そ
れでもどうしたらいいか思い浮かばず、ただ、涙
を流すあいつの傍に立ち続ける。」

「どうして、ずっとそこにいるの？」

頬を伝う涙を、もはや拭おうとすることもな
く、力なく腕を下けたまま、あいつは少し掠れた
声でそう訊いた。

「……女泣かせて置き去りにしたら、そんなの
無茶苦茶最低だろ」

罪悪感からか、ひどくばつの悪い気持ちでぶっ
きらぼつに返事した。

「べつに、泣かせてないよ。かってに、泣いただけだ
から」

「だったら余計ほつとけねーよ。泣いてる女ほつて
おいて逃げるようなやつは一番最低の男だって、
じいちゃんに散々言われてんだ」

いなくてもいいと言ったあいつに、だから気にす
るなど切り捨てる。そんなほろほろのくせしやが
って、どうしてこいつは人のことを気にするのか。
罪悪感の代わりにまた苛立ちがつのりそうにな
るのを必死の思いで我慢する。

「おじいちゃんのこと、好きなんだね」

くす、と、まるであの目をなぞるみたいに、行
方が小さく喉を鳴らす。ひび割れ引きつったよ

うなその音は、お世辞にも、笑っているように
聞こえなかった。

「うっさいな。ほら。とにかくこれで顔ふいとけ。
汗臭いかもしんないけど、なんにもないよりまし
だから」

スポーツバッグからタオルを引っ張り、あいつに
向かって放り投げる。

汗がたっぷり染みこんで重たいそれを、投げつ
けられるままに受け取って、あいつは頬に涙を流
したまま、微かに、ありがとうと微笑んだ。

それはとても哀しい笑顔だったけど、それでも
笑っていることに、おれはようやく、少しだけ、ほ
つと息を吐き出した。

それからあいつと時々、特に何も無いときでも、
話をするようになった。

ほとんどはどうでもいいようなことばかりで、
期末試験の出来がどうだったとか、高校はどう
するかとか、昨日見たテレビの内容とか、最近読
んで面白かった本の中身とか、そんなくだらない
ことを、一分でも二分でも、毎日のように話して
いた。

それはあいつを慰めようとか、付き合おうとか。
とても辛かったそのことを、なかったことにしよ
うということなんかじゃなく。

ただ、あいつが毎日、いつもと同じ場所にいるこ

と。

生きてそこにいるということを確認するためだ
けのものだった。

あいつがそれをどう思っていたのか、面と向かっ
て尋ねたことはない。

けどあいつはたぶん、ちゃんとそれに気づいてい
て。気づきながら、毎日、どうでもいい会話に
え続けてくれていた。

あいつが壊れてしまった理由。誰にも言わず、
一人黙って消えてしまおうとした真情。

おれは深く探ろうとしなかったし、あいつも多
くを語ろうとはしなかったけど、それでも時折、
ほんの少し、思い出すように言っていた。

今年の夏の終わりから、時折、会いに訪れる人
が在ったこと。

少し変わっているけれど、その人は本当にすこ
い人で、穏やかですごく優しく。けど、とても
さびしい人だと感じたこと。どうしてそう感じる
のか、自分でもわからなかったこと。

そして自分はその人に、何もしてやれなかった
こと。

最後の最後に傷つけて、ひどく苦しめてしまっ
たこと。

ぼつりぼつりと。少しずつ。

あいつは大切な思い出のかけらを、それを、ど

う思っているのかを、おれに話して聞かせてくれた。

そいつのことが好きだったのかと尋ねたら、わからないと答えられた。

自分には誰かを好きになるような資格なんてなかったから、それがどういふものなのか、よくわからないと首を振り。

それでも、自分はその人に、幸せになってほしかったと。ただそれだけを願っていたのに、自分がめちやくちやにしてしまったと。あいつは、そう言っていた。

お前は、何もできなくなかないよ。

ちよつとかたくさんかはわからないけど、お前はきつとそいつのこと、ちゃんと幸せにしていたよ。

そう言いたかったけど、言えなかった。

おれがそう思ったとしても、あいつとそいつの関係を何も知らず、二人の間に一体何があったのか、何も理解できていないおれがそんなことを言ったとしても、それにはなんの意味もなく。たとえそれが本当だとしても、あいつがそう思うことができないなら、他の誰がそれを言ったところで、あいつは救われなないとわかっていた。

そうしてあいつの言葉通り、あいつの両親は離婚して、父親の方はこちに残り、あいつは母親といっしょに、卒業前に、見知らぬ土地へと引っ越した。

たまに電話やメールをして、何度か手紙も出しあった。手紙といってもそれはほとんど暑中見舞いや年賀状と変わらなくて、文も短くそつけない。ただの連絡手段だったけど、それでも何か書いて送れば、あいつは律儀に返事を出してきた。

親類の家に移ったこと。高校は地元の国立を選び、何事もなく卒業したこと。父親が再婚して、相手はともいい人みたいで、もうすぐ子供も産まれるらしいこと。

飾り気のない葉書に綴られた数行程度の文章からは、あいつがどんな顔をして暮らしているのか、ほとんどわからなかったけど、とりあえず死んではいないみたいで、それだけは少しほっとした。

一度引っ越してしまう前に、じいちゃんのいる家にも連れて行った。

あいつの父方の祖父母は小さい頃に死んでしまつて、母方のほうの祖父母は会うところか名前を聞いたこともなく、じいちゃんのいるおれのことをうらやましいと言つたので、なら実物がどういふものか会わせてみようと思つたのだ。

家に女を連れてくるのは初めてだったので、最初はびっくりしていたみたいだけど、じいちゃんはいつこのことを気に入つたのか、一言三言話した後は、孫のおれ以上にかわいがつて、やたら親しげに話しかけては無茶苦茶褒め上げるもんだから、あいつはこれ以上ないくらいめちやくちや恐縮して縮んでいた。遠慮とか擬態とかじゃなく、本気で戸惑っているみたいだった。

父さんは帰りが遅いとかで、結局三人で夕飯を食べることにして、何もなくていいから座つてろと言つたら、あいつは首をもげそうな勢いで横に振り、台所にほとんど無理やり割つて入つて食事の仕度を手伝つた。

正直、あんなおぞましいものを平然と食つてやがつたので、行方が手伝うと言つた時は遠慮というより恐怖が先に立つて、本気で引取り願おうとしたのだけど、意外にも台所でのあいつはけつこう器用で、手際よく材料を切つていた。

「お前つて、まともに料理できるんだな」

里芋の面取りをしている行方に感心して呟いたら、褒めたつもりだったのに、なんだかとても憚然とした表情を返された。

考えてみればあれをあんなに焦がしてめちやくちやにしやがつたのは班の男子で、行方は野菜を刻んだだけらしいので、行方自身が料理下手ということには驚がらないのかもしれないが。

それでもあんなものを涼しい顔して食べるやつ

がまともに料理できるなんて、普通考えないだろう。

そう弁解したい気もしたけど、墓穴を掘りそうな気がしてやっぱりやめた。行方は少し拗ねたように口をとがらせ、まるで修行か何かみたいに黙りこくって大根の皮を剥いていた。

三人で作った夕飯は結果としてかなり豪華なものになって、ちゃぶ台の上いっぱい並べた皿の前に、みんなで同じものをつつきながら、とりとめのない話をした。

あいつに料理をよそってもらい、酒の勺をしてもらうと、じいちゃんはいたく感激し、とっておきの肴を持ってきておれ達にも食べさせてくれた。さすがに酒まで勧められそうになったときははいくらなんでも止めたけど。

おみやげまで持たされて帰るあいつを家まで送っていくからと、靴に片足を突っ込んだおれに、じいちゃんはその後ろから、外には聞こえないくらい低い声でそつと小さく呟いた。

あの子のこと、決して見捨てたりしてやるな。

じいちゃんにあいつのことはほとんど話してなかったけど、それでもやっぱり何か感じていたんだろう。背中から告げられた声は、さつきまで明るく飲んで騒いでいたのと同じ人間とは思えないほど、ずしりと重く響いてきた。

「わかつてるよ」

そんなこと、言われなくてもわかつてる。

それだけ応えて、ドアの外で待っているあいつの後を追いかけた。

好きで好きでたまらなかつた人と、その間に生まれた子供を失くして、今を独りで生きる祖父。

それが同属を哀れむものだったのか、それともおれがあいつに母や妹を重ねたように、ほんの少しでも、死んでしまった愛しい人を、あいつに重ね合わせたのか。

どんな思いでじいちゃんがそう言ったのか、今でも何もわからない。

けど一つだけわかるのは、あいつをなかつたことにしてしまうのは、きっと、ひどく後悔するということだけだった。

「へい、らっしやーいー」

藍の染め抜きの暖簾をくぐり、お品書きで埋め尽くされた壁に囲まれた、十席程度のカウンターしかない狭い店内に足を踏み入れた。

午後八時過ぎ。店内は忙しそうなもの、ちょうど食い終わった客が出たらしく、数席ちらほらと空いていて、カウンターの向こうで包丁を握る大将が、威勢のいいかけ声と共に話しかけてくる。

「おお、かず坊。どうしたい、こんな時間に」

「どうって晩飯。もう一人くるけど、先に座つていい？」

「もう一人つて、男？女？」

「一応、女」

「女あ？お前いいかげんにしかねえと、またあかりちゃんにこっぴどくどやされんぞ。ったく、そんなとこばっかり爺さんに似やがつて」

「ばーか。そんなんじゃねーよ。大体デートなら、こんな色気のないとこ連れてくるかってんだ」

「おうおう。言ってくれるねえ。悪かったな、色気もくそもなくて」

「誰も定食屋にそんなもん期待してねえよ。とにかく、奥の席二つもらうから」

慣れた憎まれ口を交わしながら、カウンターの奥に移動する。ついさつき携帯で、もうこの辺りまで来ていると言っていたから、たぶんそれほどせずに着くだろう。

「らっしやいませーいー」

がらがらと戸が開く音と同時に、頭に手ぬぐいを巻いたハルが元氣よく声を上げ、それに重なるように、失礼しますと声が聞こえてきた。それで相手がもう来たとわかる。

こんな店にわざわざそんな挨拶して入ってくるのは、あいつぐらいのものだから。

「よお」

入り口を向いて手を上げる。淡いパステルカラ

ーのハイネックに、シンプルなジーンズ。白いコートに身を包んで、あいつはそこに立っていた。

「こんばんは」

ほんの少し口元を持ち上げて、行方は懐かしい声でそう言った。最後に会った時よりも伸びた髪が、肩にかかって流れていて、それが月日の流れの早さを思わせる。

「久しぶり。ま、座れよ」

隣の椅子を引いて、早く座るように勧める。春になったとはいえ夜はまだ冷え、吹き込んでくる風はひんやりと冷たく、戸をしつかりと閉めてから、あいつはこちに歩み寄り、コートを脱いで椅子に座る。

「いらっしやい。注文は？」

行方が席についたのを見届けてから、厨房の大将がこちに声をかけてきた。

前もってメニューはまかせると言われていたので、今日の入荷を思い出しながら注文を一気に並べ上げる。

「今日の刺身に、メバルの煮付けとカレイの揚げ出し。小柱の串焼きとサヨリの皮焼きに、おれはビール。お前は？」

「わたし、ウーロン茶」

「じゃあそれも。あとなんか今日のお勧めあったら、それも適当によろしく」

「あいよ」

カウンターの向こうから威勢のいい返事が上が

り、ほどなく飲み物と刺身が運ばれる。料理が出来上がるまでの間、ビールで喉を湿らせながらバチの刺身を口にする。

「こっち帰ってくるの初めてだよな。着いたの、昨日の夜だっけ」

「うん。今日の朝からもう仕事で、ついさっき、打ち合わせが終わったところ。明日からの個展が終わったら、そのまま向こうに帰ると思う」

あれから八年。引越した行方は叔父夫婦の家に住みながら、今は児童書専門の出版社に勤めている。

主な仕事は海外作品の翻訳で、今度アメリカの絵本作家がこちで個展を開くから、今回はその手伝いと取材に来たのだとか。

「バタバタじゃん。もう少しゆっくりできないわけ」

「仕方ないよ。ファンタジーブームの再来とかで、最近けっこう忙しいし。それにこちに長くいると、おとうさん、連絡よこせて言ってくるから」

マコの刺身を食べながら、行方が小さく肩を竦める。嫌がっているのではなく、本当にただ仕方なさそうな仕草だった。

「親父さん、元氣そう？」

「うん。時々、電話かけてくれる。息子さん、もうすぐ三歳になるんだって。すこくかわいくて元気な子供みたい」

ウーロン茶のグラスを片手に、行方は穏やかに

口にする。

五年前再婚したという父親。その再婚相手との間に生まれた、二十年下の腹違いの子。自分の元を去った父親と、半分だけ血の繋がった弟のことを、僅かに目を細めて思いやる。

「そっか。会いに行ったりとかはしないのか？」

「まさか。もう、おとうさんは違う家の人なんだし。わたしがそんなことしたら、みんな、嫌な思いするだけだよ」

卑下でも嫌味でもなくそう言って、あいつはばたばたと手を振った。そんなことはないと思っただけ他人の家庭に口は出さず、代わりにサヨリの昆布締めを口に入れる。今日はいいいカタがお得な値で入ったので卸したのだが、やっぱり味はなかなかだ。

「へい、お待ち」

皿の刺身がなくなりかける頃、注文していた料理が運ばれてくる。今日のお勧めはアオヤギのめたとトビウオのつみれ汁、イカと里芋の煮物らしい。しかもついでにさりげなく、行方だけにワカメと竹の子の酢の物まで添えてあった。

ハルは現在ヤッチャバ(青果部)に勤めていて、夜だけこの店を手伝っている。店に気に入った女が来ると、必ず何か自分のところから卸した野菜を使った一品をサービスするのだが、その代金はきっちり自分の懐から引かれているらしく、旬の竹の子まで張り込むのは珍しい。

こいつ結構、ここの二人の好みっていうことか……

わかりやすい反応に、思わず厨房を覗き込んでしまう。こっちの視線に気づいているのかいないのか、禿げた大将と頭に手ぬぐいを巻いたその息子は甲斐甲斐しく腕を振るっている。働く男の背中がカッコいいのだと、まるでそう見せつけているみたいだ。

どうでもいいけど。ハル。お前、こいつがおれと同じ元クラスメートだって気づいてるのか。

「なに、これ？」

青みを帯びた銀色の皮がくるくると巻きついた串を、行方は不思議そうに眺めている。

「サヨリの皮焼き。サヨリの皮に塩振って、軽く串に巻いて焼いたやつ。一つ食ってみ。うまいから」

言われるまま一串手にとって、あいつはしげしげとそれを眺めた後、ぱくりと小さく口をつける。

「おいしい」

「だろ？」

ちよっとびっくりしたような行方の反応に、にんまりと頬を緩ませる。こいつがそういうことを素直に言うときは、本当においしいと思っっている証拠なのだを知っていた。

ついでに厨房に目を向けると、こっそりこっちを窺っていた大将達とぱっちり視線ががち合った。慌ててまな板に向き直っていたけど気にしている

のがバレバレだった。

「向原くん、こゝ、よく来るの？」

「んー、まあな。店から近いし、うまいし、お得意さんの一人だし。ここの大将、親父の幼馴染なんだよ」

酒癖悪いけど腕は最高だぜ、と言ったら、大将からの睨まれるような視線と、おれのことも紹介しろというハルの目の訴えが突き刺さる。

それさえなかったら、ついでにハルのことも紹介してやろうと思ったけど、やめた。自分で気づくまでほっておこう。見た目はそんなに変わっていないんだから、気がつかないのは自己責任だ。

行方は素直にそうなんだ、と頷いて、ベコリと厨房の方に頭を下げてお辞儀した。

それだけで、さっきまでの仏頂面はどこに行っただのか、大将はどぎまぎしたようにぐいと頭を下げ返し、ハルは手ぬぐいが巻かれた頭をかきながら、でれっと頬を緩めていた。

……築地の男って、こういうタイプには本当に免疫ないんだよな。まあこいつみたいな女は、外でも珍しいんだけど。

出汁を吸った大根おろしをまぶしたカレイの切り身を噛み締めながら、そんな感想を一人こちる。

「それより、向原くん忙しくなかったの？」

イカの風味がきいた里芋をもくもくと口の中で転がしながら、行方が心配そうに尋ねてくる。

「平気平気。確かに忙しいけど、明日は市場休みだし。晩飯付き合うくらいどつて」とないって

ほじったメバルの煮付けを口にしながら、気にするなと著を下させせる。素人のこいつでも市場の朝が早いということは知っていて、今回会うと決めた時も、かなりおれのことを気遣い遠慮していたのだが、半分強引におれが押し切った。

「だったら、いいんだけど。お仕事、楽しい？」

「まあな。まだ修行中だし、大変なことばっかだけど、好きで飛びこんだ世界だし。すこくやりがいはあるよ。ただ」

「ただ」

「いや。所帯持つなら、もっとしゃんとしなけりやと思うけど」

おれは高校を出た後、河岸に入り、今は築地の場内で鮮魚専門の仲卸に勤めている。甘えが出る、じいちゃんが死んで親父が跡を継いだ店ではなく、じいちゃんの古い親友がやっている所で修行していて、今付き合っている彼女はそこのお帳場にいたりする。

というか、今日こいつに会うことを話したらものすごい勢いで睨まれて、散々浮気じゃないことを説明した挙句、会うなら場外の店にしろと念を押されて、ここで食事することになったのだ。

築地は狭く、噂は一日で隅々まで知れ渡るので、こゝならおかしなこととはできないというわけであ

る。

まあいいけど。この店安くてうまいし。行きつけだし。大将とも顔馴染みだし。

でもあまりに信用がない気がして、せつかく外出が許されても正直素直に喜べない。もつとも同僚には揃って当たり前だと言われたが。ここに来てから約五年。おれは場内きつての遊び人として浮き名を流しているらしい。

「それじゃあ、もうすぐ結婚するの？」

「子供ができたって言われたからなあ……これでもおれ、気をつけといたはずなんだけど」

酔味噌のからんだアオヤギをつまみ、ぼやくようにため息をつく。数日前恋人から告げられた事実は全く予想外の出来事で、店の中だというのに思わず大声を上げそうになるほど驚いた。

「あかりさんだったっけ。子供、できたんだ」

おれが子供を作ったというのが意外なのか、あいつが目をばちりと大きく開いて瞬きする。

「つたく。どうして子供ができるのか、こつちが聞きたいって。おれ本当に気をつけてたんだぜ？まだこの先どうなるかわからないのに、あいつに負担かけるわけにはいかないから。なのになんで、いきなりそんなことになるんだよ」

ピールのジョッキを握りしめ、思わず愚痴をこぼしてしまう。他の連中はさておき、こいつはおれがそういうことに関しては細かいと知っているので、つい誰にも言えない言葉が出てしまう。

「向原くんが気をつけてたなら、あかりさんが作ったんじゃない？でないと、子供はできないし」

一応、それなりの常識ぐらいいあるらしい行方は、こくまっとうな意見を述べてくれる。まっとうなんだが、それがどういう意味なのかはあまり考えていないらしく、けろっとした顔でそんなことを言うものだから、聞いているほうの頭が痛くなる。

それってつまり、あいつがわざと子供できるように仕向けたっていうことになるんだが、そんなことを平然とした顔で言うのはやめてほしい。他のやつが言う分には構わないけど、こいつが言うのはなんとなくこつちの精神衛生上よろしくない。

「妊娠軽く考えんな。あいつ、おれが墮ろせとか別れるとか言ったり、逃げたらどうするつもりだったんだ？」

無謀というか無計画にもほどがある。世の中の男全部が全部、責任取ってくれるやつばかりなわけじゃないんだぞ。何かあったとき痛い目見るのはいつも女のほうなのに、どうしてそんな危ない橋を渡るのか。おれが父親の立場だったら、はっきり言って気が気じゃない。

「向原くん、そういうこと言ったりするの？」

「じょーだん。言うわけねえだろ。自分から子供作っというて生まれそうになったら墮ろせなんて、そんな身勝手なこと言えるかよ」

「じゃあ、もしその子が、本当はできてなかったり、向原くんの子供じゃなかったら、向原くん、その人のこと、嫌いになったり、お父さんになりたくないって、そう思う？」

「それこそまさか。やることやっというて、子供ができてなかったら結婚しないとか、生まれてきた子が自分の子供じゃないかとかどうだとか、んなことぐぐち言ったりするやつは最初から女と寝るなっつうんだよ」

テレビドラマとかでよくありそうな設定をばっさり切り捨てる。血液型だとかDNA鑑定だとか一々しなきゃならないような、そんなぎすぎすした家族なんて作りたくとも思わない。

自分が抱いた女が子供を産んでおれの子供だと言ふのなら、それは問答無用でおれの子だ。そこには何の疑いも言い訳の余地もない。だからこそ頭を抱えてしまうわけなのだが。

「たぶん向原くんならきつと、そんなことしないで思ったから、その人、うれしそうだったんだよ」
行方はなんでもないことのように、そんな感想を口にする。子供ができたの。そう言われた時の恋人の、これ以上ないほど嬉しげで、勝ち誇った顔を思い出す。

「……してやられた、っていうことか。あーあ。これで遊んでいられるのもおしまいかあ」

まさか二十三やそこらでつかまるとは。もしじいちゃんが聞いたたらなんて言われることだろう。

結婚は人生の棺桶と一緒にだから、せめて四十くらいまでは遊び倒せと言ったのに。

「けっ、あきらめ早いんだね」

「しょーがないだろ。それにあいつ、一応初めての相手だったらしいし。そういうのって、やっぱり責任取らなきゃいけないだろ」

「……向原くんって、意外とっていうか、なんだかちよっぴり古風なんだね」

「やかまし。責任取らずにところ構わず精液ばら撒くようなやつは、遊び人じゃなくて種馬なの。おれこう見えても、一応ちゃんとした人間だから」

失礼なことを言う行方に、人の筋を説いてみる。半分くらいいいちゃんの受け売りでもあるけれど、今も昔も変わらず、それは本当のことなのだ。

「で、そういうお前はどなの。新しい男とかできたりした？」

「つみれ汁をすすりながら話の矛先をそっちに変える。」

「つうん」

「というか、恋人がいたことなどないと、あいつは首を横に振った。」

「やっぱりというか、なんというか。予想通りの反応に、やれやれと深く息をつく。」

「お前さあ、せめて彼氏とまではいかなくても、男と仲良くするだけでもバチは当たらないんだぜ？」

何も一緒に寝るとか結婚しろというわけじゃない。ただ話して飯を食ったり、外に遊びに行くだけでも、相手を作ればいいのと思う。

こいつは昔からどうも女が苦手らしいので、職場の同僚といたって、女相手に腹を割った付き合いができていたとは思えないし、それならせめて男友達の一人や二人いても構わないと思うんだが。

「仲良くしてないわけじゃないよ。時々、同じ仕事場の人達と、ご飯いっしょに食べることもあるし」

「そうなのかな？ならいいんだけどよ」

ちよつと意外な反応にびっくりしながら、内心少しほっとする。よかった。こいつも一応、まともな人付き合いができるようになったのか。

「食事って、昼？それとも夜？いつもどんな感じで飯食ってるの？」

余計な詮索とは思いつつも訊いてしまう。こいつが自分のことを語ることは少ないので、その間に聞いておかないと、後でなかなか教えてくれないのだ。

「ほとんどお昼で、たまに夜。みんな食事に行くうとするとき、いっしょに行かないかって」

「ふうん、いいね。で、楽しい？」

「あんまりよくわからない。」飯はおいしいと思うけど。でも、お金全部払おうとしてくれるのは、ちよつと困る」

「飯奢ってもらえるなら、いいじゃん別に」

おれも今日奢るつもりだし。口に出さずにそう呟く。

「よくないよ。わたしだけご馳走してもらうなんて。そんな理由ないし、悪いもの」

行方は眉をぎゅつとしかめて首をふるふると横に振る。こいつがこういう性格だということは承知しているので、おれはふんふんと首を縦に振る。

妙に律儀というかなんとというか、人に借りを作ることをこいつは極端に嫌がるので、何か奢ろうとしても、全額奢るのはおれでもかなり難しい。成功したのは缶コーヒー一本ぐらいのものである。それも問答無用で押し付けて。

「それで」

「それで？」

「休み、いっしょにどこか行かないかって、時々そう言われる」

「どこかって？」

「いろいろ。遊園地とか、海とか、動物園とか。あと一回、温泉も言われたかも」

「へえ……って温泉？」

それまでにこやかだった口調が、いきなり音を立てて硬直する。同時に聞き耳をそばだててやがったのか、厨房の男二人の背中までびくつと跳ねるのが目に入った。

今なんだか、とても穏やかではいられない単語を聞いたような気がするんだが。

「うん」

興味ある、って訊かれたただだから、たぶん違うと思うけど。そう続け、竹の子とわかめを咀嚼しながら僅かに首をひねる行方に、段々嫌な予感が募っていく。

「……あかさ」

「なに？」

「お前それで、一度でも、休日そいつらと付き合ったことあるの？」

恐る恐る、一抹の不安と望みを胸に抱いて尋ねてみる。

「ううん。ないよ。わたし、休みはいつも一人だから」

行方は実にあっさり、そんなことをのたまった。

「……………」

重症だ。何が重症って、そこまでされて口説かれていることに全然気づかないこいつの感覚がすさまじい。

毎回のように飯を奢られかけて、休日も飲みに誘われて、それで言い寄られていないというのなら、こいつは一体男をなんだと思ってるやがるのか。聖人君子のように奇特なやつだとしても言うつもりか。それとも自分は女だと自覚すらしていないのか。

たぶんその両方だろうと、砂漠で水もやらすに種を巻くのと同じくらい不毛な努力をしているその同僚とやらに、心底同情しそうになる。

こいつは自分がそういう対象として見られるなど、本気で考え付いていないのだ。

「じゃあなに。お前この八年一度も、男と手つないだりデートしたり遊びに行ったりキスしたり押し倒したり押し倒されたり、そういうこと全然なかったわけ？」

一体どんな青春送っているんだろう。十代二十代は一度通り過ぎたら、二度と帰ってこないのに。花開くことなく枯れていこうとするには、おれもお前もまだ若すぎる。

老婆心ながら、そう口にしようと思ったら。

「……押し倒した、っていうのとは、ちょっと違うかもしれないけど」

持っていた箸を下ろし、少しだけ、声を落としながら。

「男の人と、いっしょに倒れたことなら、あるよ」

あいつは静かに、そう言った。

「え……………」

初めて聞いたその言葉と声に、行方の顔を凝視する。

「…………部屋のソファ。思いきりぶつかって、バランス崩して、そこに二人で倒れたの」

さっきまで談笑していた雰囲気はどこへ行ったのか。あいつは手にしたグラスを置き、顔をうつむけ、ぼんやりと中に沈んで浮かぶ氷のかけらを見つめていた。

「ぶつかって、誰が」
聞くまでもなく。

とうにわかっている答えを、確認のためだけに問う。

「わたしが。その人に」

力いっぱい、抱きついたので、と、呟くように、行方はそんな言葉を口にしました。

少いうつむいた表情と、遠い何かを想うようなその視線が、相手が誰だったのか強く物語っていた。

「お前見かけによらず、結構大胆なことするんだな」

思わず、正直にそう口にする。

止まった時間。固まった空気を、ゆっくりほぐして緩めるように、そう言いながら笑いかける。

「別に、そういうのじゃないよ。それにあのとき、わたし、子供だったから」

それをどう受け取ったのか、あいつは首を横に振り、おれの言葉を否定する。その顔はもう、どこか遠い場所ではなく、きちんとおれのことを眺めていた。

こいつは大人と子供の意味を、ちゃんとわかって
いるんだろうか。

あくまで客観的な意見を言わせてもらおうなら、
八年前のこいつにそんなふう押し倒されて相手
がとち狂わないという保証は、正直、どこにもな
かったと思う。あくまで客観的だけど。ちなみに
主観で言った場合、おれなら我慢する保証はな
い。いや、八年前と限定するなら、たぶん日くら
いまでしかないけど。

こっちの思惑なんか全く理解してないあいつは、
苦虫をかみつぶしたみたいに顔をしかめているお
れを不思議そうな目で眺めている。

こいつは全然無自覚だけど、なんとつか時折、
昔から、庇護欲と加虐心をいっぺんにそそる、独
特の雰囲気を見せることがある。

それは俗に言う寂しい色気だとか、そういうわ
かりやすいものじゃなく。

こころが壊れたがらんだろうの人影が、無防備に
歩み寄ってきて、空ろな瞳で目の前にある、ひと
のかたちを確かめるような。

自分自身に意味はなく、そしてこの世界のどこ
にも、自分のいるべき場所などないのだと、なに
もかも全部諦めて、それでも生きているものの価
値を、生きていたものの温もりを、そうしてそれ
に触れることを、どこかとおしんでいるよう

な。

そんな胸をかきむしりたくなるような、どう
しようもなくやるせない気持ちにこいつはさせて
くれるのだ。

それはよっぽど注意深く見ていないとわからな
いくらい、とてもおぼろげで儂くて、けど一度氣
づいてしまったら、二度と忘れることなんてでき
やしない。

大抵の人間は見落とすだろう。普通の男なら
逃げるだろう。

そんなものは重過ぎる。ほとんどのやつには重
過ぎる。

見ているだけで心がぎしぎし軋んで悲鳴を上げ
るようなものは、目を逸らすか、叩き潰すか、思
い切り抱きしめて黙らせるか、そのくらいの選択
肢しか存在しない。

徹底的に叩き潰してしまう悪意も、壊れるほど
抱きしめる勇気もないやつには、目を逸らして、
なかったことにしてしまうしかできないのだ。

誰かの特別になるということ。誰かを救い上げ
ること。

誰かを幸せにするということとは、不幸にするの
と同じぐらいの覚悟がいる。

こいつは一度も、助けてくれと言わなかった。

大切なものを大事にできないこと。好きな相手
に何もできず、苦しめ哀しませてしまうこと。ど
うすれば少しでも幸せにすることができるのか、
いつまでたってもうまく理解できないこと。

誰も恨まず。何も憎まず。あいつはそれだけの
ことに泣いていた。

眼球が壊れてしまったみたいに、表情を変えず、
声も上げず、瞼ひとつ、びくりと動かすこともな
いまま、目からぼろぼろ雫を零し、ただそれだけ
に涙した。

あいつはたぶん、そいつのことが、本当に好きだ
ったんだろう。

本当に好きだったから、そいつになにもできな
い自分のことを、どうしても許してやれなくて、
だから告白一つすることもできず、離れてしまっ
たんだろう。

自分は幸せになりたいと考えることもなくせ
に、大切なものの幸せだけを、ただひたすらに願
っている。

それはまるで幼い頃に読んだ寓話。自慢の髪を
切り落とし、夫のための贈り物を用意した、賢く
愚かな無償の愛。現実にはそう有り得ないとし
りながら、だから密かに憧れた、遠い昔、遥か異

国の物語。

ああ、だから。おれはこいつをほうっておけないのだ。

「ふーん。それで、おれのことには押し倒したいって思う？」

じつと瞳を覗き込み、何気なく、けどはっきりと問いかける。

嘘もごまかしも何も無い、直接的な声と視線。

あいつは少し首を傾げた後。

「ううん。全然」

と、悩む素振りも全く見せず、あっさりと言いつつ、と、悩む素振りも全く見せず、あっさりと言いつつ、

「……お前って、やっぱり性格悪いよな」

そういうときは冗談でもちよびり考える。男のプライドを粉々に打ち砕いているとも知らず、当の本人はもくもくと小柱を口に運んでいる。うまいと思っているかどうかは知らないが、おれはそれが十分うまいと知っている。やっぱり顔をしかめながらも同じものに手を伸ばす。

「幸せにね」

ふいに、あいつが呟いた。

「男の子か、女の子かはわからないけど。その子

のこと、きつと、幸せにしてあげてね」

まるであいつは祈るように、そんな言葉を口にした。

だからそれに、おれはとびきりの笑顔で返してやった。

「当たり前だろ。おれの子だぜ？」

だから、お前も幸せにな。

(おわり)

最後の言葉は口に出さず、一体何がおかしいのか、くすくす笑うあいつの前でジョッキに残ったビールと一緒に飲み下す。ひとしきり笑い終わった後、あいつはウーロン茶のグラスを横に置き、そつと小さく、その口元を緩ませた。

希望というには程遠い、でも、どこかほっとしたような、安堵の浮かぶ微かな笑み。

それがまだ生まれていないおれの子供の幸せを、心の底から願ってくれているのだと、嫌でも分かってせられてしまう。

八年経ってもこいつはまだ、人の幸せばかり願っている。

自分の想いが叶うことなど、見果てぬ夢だと思いつつ、

努力したものが報われるなんていうのは理想論で、強く想えば相手に気持ちが届くというの

は、ただの幻想かもしれない。

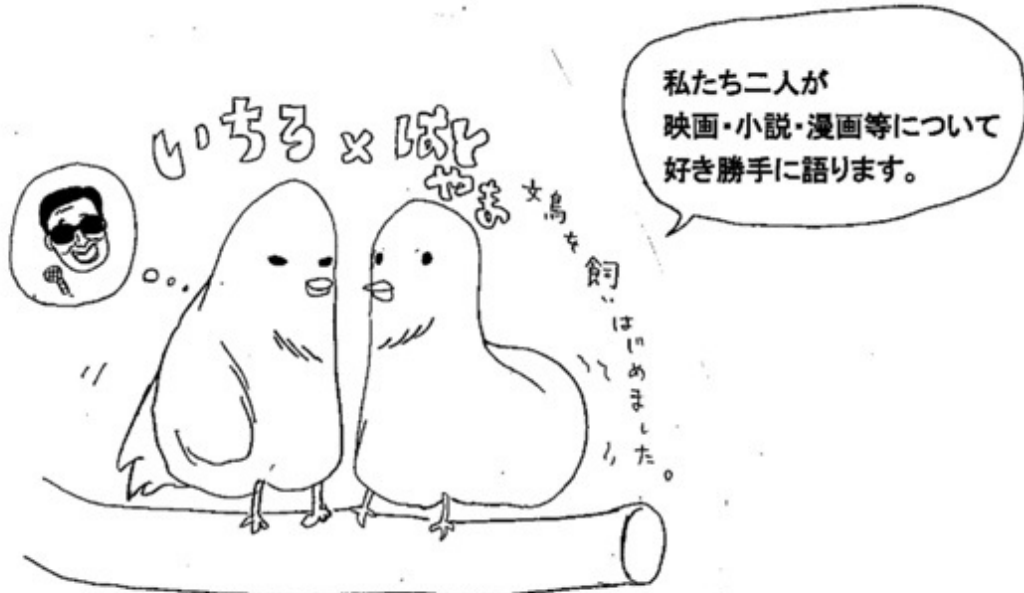
それでもいつか、こいつの想いが届いてくれればいいと思う。

そうして届いたその先に、たとえほんのひとかけらでも、幸せが待っていてくれればいいと思う。

賢者のおくりものは遠回り、いつだってすれちがいに届くものだ。と相場は決まっているのだから。

鳩山 × 一路 サブカル対談

第9回



第9回目のテーマは、「タモリ論」です。

とりあえず、おすすめの『タモリ本』について

鳩山…今回のテーマはタモリ論ということ
で、よろしく願います。

一路…よろしく願います。

鳩山…じゃあ、一路さん何かありますか。

一路…一応、タモリ関係の本を四冊読んだ
りだけ。

鳩山…お、読んだね。

一路…タモリ好きとしてはね。最初に、『タモリ論』¹、『タモリの言葉』²、『タモリ学』³、『タモリ読本』⁴、と読んでみた。タモリを研究して分かったことが三つぐらいあるんだけど。まず一つ目は、一番おすすめの本がタモリ学であったということ。『タモリ論』は最初に出た本だったから結構話題にもなったけど、途中からビートたけしや

¹ 樋口敏宏『タモリ論』新潮新書、二〇一三年

² 「僕たちのタモリの人生論」編集委員会『僕たちのタモリの人生論——人生に大切なことを教えてくれたタモリの言葉』リンダブックス、二〇一四年

³ 戸部田誠（てれびのスキマ）『タモリ学』イーストプレス、二〇一四年

⁴ 『タモリ読本』洋泉社MOOK、二〇一四年

明石屋さんまの話に脱線したり、松本人志の映画の話が出てきたり。中盤から迷走するから、結局タモリじゃないなって思っただけで、タモリの言葉を読んですこい。

鳩山…特にオスメの言葉とかあるの？

一路…オスメって感じじゃないけど、みんなに教えてあげたいのとしては、「お客さんのほうを見ないと緊張するんですね。見ると向こうが緊張してきますから。」って言葉。私も仕事するときプレゼンする機会が多いし、昔は「自分すこいぞ」と思ってたから堂々としてたのに、最近よくおどおどするようになって。いろんなことが分かったからこそ、知識が多くなる分すばつと言いきれないことがあるじゃん。

鳩山…深いね。分かる分かる。

一路…だからもういっそ「相手をじつと見る」っていうね。基本相手の目とか見れないタイプだからさ、この言葉を折に触れて思いだす言葉にしよう、肝に銘じよう。

鳩山…「プロとしての仕事」の項にあるね。一路…ただ、『タモリの言葉』って本は、名言集としては面白かったんだけど、いまいち前後の文脈が分からないんだよ。下の方

にエピソードや編者の感想は載っているけどね。

鳩山…言葉だけを抽出しているから。

一路…そう、そこでいくと、『タモリ学』はタモリの哲学が分かりやすい。だから『タモリ学』の方と一緒に読むと、よりタモリの思想が分かりやすいよ。

鳩山…これは体系づいているもんね。

一路…一番よくまとまっているなと思った。最後に『タモリ読本』は、親交のあるタレントとか業界人のインタビュー中心だから、業界ネタが好きな人が読んだら面白いだろうなって感じ。ただ、最後に「俺の・私のタモリ論」っていう項で、町山智浩さんっていう映画評論家の人の文章があるのね。この『タモリ読本』はこの人の文章だけを読めばいいっていうぐらいに私は良かったと思うの。

先に、タモリがなぜ優れているか、思想史から話をすると、1960年代にレヴィンストロースとかが出てきて、構造主義が確立するんだけどね。その前段階として、ソシュールの言語学があるけど。この構造主義っていうのは、全てのものには差異があり、その構造を取り出して考えることに

意味があるということ、言語学についても、英語やフランス語とか他の言語との差異というものがあって、その構造を読み解くことが重要だっていう流れ。これが出てきたのが60年代の思想だった。70年代にアンダーグラウンドで暗躍したタモリという人は、四ヶ国語麻雀とかのデタラメ外国語でその構造主義の思想を壊していった。言ってみれば、脱構造主義というか。ポスト・モダンの世界にいて。

鳩山…いち早く。

一路…そう。タモリの四ヶ国語麻雀やハナモゲラ語は、言語の差異さえも無意味として捉えて、脱構造主義の思想上にあった。

鳩山…言語をただの音の響きとして扱って、意味の無いものにしたんだよ。

一路…日本では学生運動の時代、右とか左とか言って、その後そうした議論は収束していくけど、すでにアナキーな世界観をタモリは持ってた。それで、町山さんの話に戻ると、町山さんはそれを「タモリさんはもう80年代を先取りしていたからある意味そのなかに溶け込んでっちゃった」と言っているのね。時代がポスト・モダンになった時に、自分を大衆の中に放り込んだ、

と。いいともが始まるのが80年代だもんね。それで、面白い部分があるんだけど。いいともには、何の接点もない人が次々と出てくる。「髪切った？」ぐらいしか話題のない人ね。町山さんは、「あれは君との話題はそれぐらいしかないよってことを象徴している言葉だと思う」って言っているの。

鳩山…へえ。

一路…「ミュージックステーション」見ても、「あつ、そう」としか言わなくて、「あれは天皇陛下だよ。昭和天皇の真似はタモリさんの持ちネタだったけど、まったくその状態になっている」とも書いている。

鳩山…四ヶ国語麻雀の一人で、テレビでは放映できないってね。昔はパロディだったけど、今は日常に入っていると。私も、一路さんと出会った初期の頃に、「日本人の象徴は天皇じゃなくてタモリ」って言ったね。一路…言ってたね。(笑) 右も左も批判して無意味の世界に入っていく、人間すら否定してイグアナになっていたタモリ。

鳩山…自覚的無思想というか。

一路…うん。だけど、現代は不安定な社会の中で「将来どうなるかわかんない人がいっぱいいるのに、J・POPは「明日を信

じて」とか歌っているばかり」だから、そんなタモリがミュージックステーションでいつか爆発して、「お前ら偽善的だ！」と言ってくれるのを期待していると町山さんは言っている。町山さんだけじゃなくて、いいともが終わった後、タモリが何をするのに期待している人って多いんだよね。まあみんな分かっているんだけどね。期待しつつも、タモリさんはそんな期待に応える人ではないと。その文脈に乗って生きる人ではなくて、それを切ろうとしている人だから。80年代に、いいともと同時期にタモリ倶楽部が始まっているのにちよつとびっくりしたんだけど。

鳩山…いいともが始まる時に、それまでの「深夜番組のタレント」ってイメージも無くないように、戦略的に「タモリ倶楽部」も併せてスタートさせたって書いてあったね。

一路…表と裏みたいな感じで、それってすごいよね。ビートたけしがいいとも最終回の時にタモリに表彰状を渡したんだけど、「二流とも三流ともつかない芸人しか出ないと言われていた『タモリ倶楽部』に全精力を注いで頑張っていただきたい」って言

っていたの。私の意見としては、みんながタモリの新時代に期待しているんだけど、きつとタモさんはマニアックな「タモリ倶楽部」の世界を淡々とやっていって、いつかふわっと引退するんじゃないかと思う。たぶん、「タモリ倶楽部」が終わる時こそが本当のタモリの時代の終わりというか。で、次の言いたいことに移るんだけど、『タモリ学』にあつたけど、笑福亭鶴瓶が話し出すとタモリは途中で必ず切りたくなると。

鳩山…書いてあつたね。

一路…それはこのままいけばオチで必ず笑いがとれるからそれを壊したい、って。

鳩山…予定調和的なものを崩したいのね。一路…そう。その予定調和を壊すのがタモリの哲学だけど、私がちよつと注目したのはね、『タモリ学』で「タモリは高田純次を見ると『不安を覚える』という。何を考えているのかさっぱり分からない、と。」って書いてあるところなの。

鳩山…おお。憧れているんだ、高田純次に。一路…そういうことなんだよ。つまり、タモリ自体はこつちから見たら自由に見えるんだけど、不自由の中に生きているというか、規範を感じすぎるといふことなんだよ。

鳩山…それは私も感じた。結局は物事の流れをいち早く察する能力があるからこそ、それを断ち切ることもできるわけだからね。一路…高田純次は予定調和の中で生きていない人で、本当はタモリの理想とする人なんだよね。だけど、逆に不安を覚えるっていうことは、タモさんって生きにくい世界で生きているんだなって思うわけよ。

鳩山…こうやってタモリに関する本を皆が読んだりして、タモリの適当さを皆が良いよねって言うているけど、実はタモリはある種、誰よりも常識人であるということは言えるかもね。

無駄な記憶を愛するという共通点

一路…『タモリ読本』で、町山さんともう一人、気になった人がいて。RAM RIDERという人の文章。おそらく私たちと同じ年代ではないかと思うのね。何が良かったかって、私たちがみたいだなんて思ったから。この人は、中学生時代に、VHSテープの録画収集癖があつてね。ダウンタウンの「ガキの使い」とかを。それで、同じような収集癖のある友人のKは、いいともを毎日全

部録ってたらしいわけ、ずっと。

鳩山…お。

一路…中学時代の同窓会があつて、Kと再会したときに、みんなが仕事や収入や恋愛の話をしている横で、いまだに、藤子不二雄Aがいいともに最初に出演した時にタモリにプレゼントしたイラストは、プロゴルファー猿だったか喪黒福造だったかを話していたと。それでこの人は、「僕らには『無駄な記憶を愛する』という共通点があつた」と書いているの。そうやって何十年かたつた後でも、タモリを語るっていうことは、自分たちの日常を語ることであり、「タモリを親ている自分を語る」ことなんだと。何かその感じ分かるなと思って。私たちも出会った当初に、夜に職場の無駄に広い敷地内で出口が分からなくて「出れない」とか言つてうろついたなって（笑）

鳩山…あつたね（笑）星がきれいとか言つて。グラウンドの方側の出口があるはずつて言つてさ、ゆめタウンの看板が見えたからそれを目指したんだよ。絶対行けるよとか言つていたけど、かなりの距離あつたよ。でも七時ぐらいで閉まる門が五分過ぎでいてさ。「飛び越えられるよ！」みたいな

（笑）

一路…最終的に門を飛び越えて出るっていうね、若かつたね。普通の人は敷地内の最短ルートを探すんだろうけど、私たちは何となく敷地外の道路を目指して歩き回つたという（笑）まあ、その無駄を愛するところがね、似ているなあと思つて。

鳩山…さっきの話と少しかぶるけど、タモリも予定調和を察する力があつてそれを崩すつていうことと同じで、無駄を愛するつていうことは無駄を自覚しているんだよね。だから、他の人と同じこともそれなりにできるんだけど、「あえての無駄好き」というか。

一路…無駄だつて分かつていてそうするから、楽しいんだね。無意味だと理解しているからこそ。不思議だけだね。

自由という不自由

鳩山…根本的に、最近の「みんながタモリ好き」みたいな風潮自体が、本当にそうなのかと思う。

一路…ああ、確かに。私も思う。
鳩山…だつて、「やる気のある者は、去れ。」

とか「俺のやる事に意味なんかあるわけないだろ！」とかの有名な言葉があるじゃん。この言葉を見て不安にならないのかなって。一路…タモリが？ みんなが？

鳩山…みんなが。私の感覚では、タモリの言葉に対して、例えば95人の人が不安になって、5人ぐらいがいいよねって言うような割合じゃないかって思うけど、今は95人の人がいいよねって言うているじゃん。一路…それに近いことを私も思っていて、一つ目で思想の話をした時に、最後言い忘れたことがあって、今それとつながったんだけど。なぜ年代の流れの話をしたかというのと、今もう二〇一〇年代だけどゼロ年代で出てきた社会学者とかが、まあ特に古市憲寿さんだけど（笑）若者に「夢をあきらめさせろ」って主張しているのね。つまり、夢に向かって生きると社会が言うわりには、夢ばかりを追ってフリーターが増えて低賃金の生活とかを強いられているのは、社会が夢をあきらめさせなかったからだ、と。夢なんか持っているから夢追い人になるんだという、文化系な若者にこの心理が受け入れられている。

鳩山…怖いねえ。

一路…そう、それが私は嫌なんだよね。ただ、タモリはすでに先取りして「夢があるから不幸がある。そんなもの最初から持たなきゃ不幸にならない。」と言ってきた。鳩山…でも、タモリが言っているのとその社会学者たちが言っているのは意味合いが違うと思う。

一路…そうだよ。でも、今の若者たちは、古市さん達と同じような文脈の中でタモリの言葉も受け入れているんじゃないかな。鳩山…何か分かるかも。「自由という不自由」という言葉が、私が大学生の時、ゼミで流ったんだけど、今それと近いような気がした。ゼミの先生は、本当に心から「自由になりたい」「だけどなれない」ってずっと苦しみの中で過ごしてきて、結果、「不自由さの中に自由がある」という結論を人生経験の実感として打ち出したんだけど、それがただ自由になりたいと思ったことのない人の言い訳みたいに、二十歳くらいの大学生の人に消費されているとゼミの中で思っていた。「自由という不自由」というところで、先生も学生も盛り上がるんだけど、噛み合っていないのに何で盛り上がるんだろうとずっと思っていて。当時の同級生たちが、

「自由という不自由」をどう理解していたかっていうと、就活とかしていて、「どこに就職するかという選択肢がいっぱいある。それが不自由だって。だから自由だけ不自由っていうのは分かる」って言うんだよ。でも、先生が言いたい自由は、選択肢がいっぱいある中で何を選ばいいか分からないというのとは違って、何かもって根源的な、自分が0から1を作る自由であって、選択肢の一つじゃないんだよ。それは似て非なるものなんだよ。

一路…まさにそうだね。同じ言葉でも意味が違う。

鳩山…斜めの位置から見ればそれが分かるんだけど、自分がどっちかのポジションに立ってしまったら、言葉が一緒だからさ、分かんないみたいなきっかけがあるんだよ。一路…そうだね。

鳩山…世の中の流れとして、どんどん能動的になるっていうか、テレビからインターネットに変わって、参加型みたいなものが増えて、ブログとかツイッターみたいなもので自分も表現する側にまわれるから、一見すると表現格差みたいなものがどんどん埋まっていくような幻想が広がっている。

テレビもドラマみたいに一方的に受動する番組が廃れて、クイズ番組みたいな参加型の番組が流行っているように見える。一見、それは能動的になった、参加型になったって言うんだけど、選択肢を複雑化しているだけで、受動態であることを隠しているというか。村上春樹の『多崎つくると』の中で、腕を折るか足の骨を折るかどちらかを選ばせてあげるみたいなのがあったけど、自分に選択肢があるように見せかけて、本当は強烈に支配されている。結局そういう構図に思えるんだよね。それにまんまと騙されている人たちが、「自由という不自由」という言葉を消費したという図式があると感じたんだよね。

一路…一方で、古市さんみたいに希望とかを持たずに日常を淡々と生きて楽しめばいいって人に、安全や安心の志向性を持った若者が同意している。そういう若者が同時に、優しくポジティブな言葉を好んで、そっちに向かっているというか。

鳩山…話を整理できないからいくつかエピソードを話すんだけど。公務員試験の予備

村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文藝春秋、二〇一三年

校に通っていたときに、「公務員に合格して、夢が叶って良かった」って言って泣いている女の子がいたの。それがまず違和感¹。

一路…確かに（笑）

鳩山…浅野におの『ソラニン』って、就職する人に対して、「人間卒業おめでとう」って言うんだけど。

一路…ああ、あったね。

鳩山…それも違和感。就職するっていうのと夢を追うっていうのを二項分立したり、逆に公務員になって夢が叶ったって泣いたりやうみみたいな。どっちにも違和感がある。

サラリーマンになったら敗者で、芸能人になったら勝者っていうのもおかしいと思う一方で、「サラリーマンの私、主人公」って思い過ぎるのもいかなものかと。主人公にならなきゃいけないっていう強迫観念みたいなものがあるよね。そのことを前提に、「夢をあきらめさせろ」って言っているんだろうけど。

一路…そうね。身の周りの小さな幸せの中で淡々と生きるってことだから、夢が叶って泣いちゃいけないんだらうね。「当たり前です」って感じていなきゃ（笑）

鳩山…さっきの、タモリが規範を知ってい

るからこそ崩すみたいな話と同じで、淡々と生きると言うほど、「僕は主人公になりたい」って言っているように聞こえる。

一路…古市さんの考えと朝井リヨウの考えは同じだなんて思っているの。『何者』で「何者にもならない・なれない」ってことを書きながら、自分は何者かになっているっていう。古市さんもみんなにそう言いながら、テレビやラジオに出て古市さんになっているというか。私が「何者かになりたい」人間だから、そこにどうしても違和感があるのかなってずっと思っていたんだけど。

鳩山…でもさ、さっきから自分が言っていることと逆のことを言うようだけど、やっぱり素直に言えば、私も「何者か」になりたいし、主人公になりたいよ。人生に意味を見いださず生きるなんて、その方が難しい。例えば仕事をするのも、1%の偽善がそこにはないと。ほぼ99%は「ばっからしく、お金もらえりゃいいや」と思っているんだよ。でも人生のほとんどを仕事に費やすのに、1%も意義を感じないって逆に難しいよ。ただ、ときどき疑うってことがいいんじゃないかと思って。結婚する、子どもを持つ、出世する、給料が上がるとかそ

ういうイベントを全否定するわけじゃないんだけど、ときどき折に触れて「これって本当？」と思うこと。能動的であれってことなんじゃないか、と。

一路…クリティカルシンキングというか。批判的思考ってやつだね。「今、能動的なのか？」って考えた方がいいね。全てのことに対して。

結局自由って何だろう？

鳩山…自由って何だろうということを考えたいんだけど。

一路…さっきの、選択肢が増えて好きなものを選べない「自由という不自由」の話だけど、やっぱり私は、「好きなことを選ぼうぜ！」って言いたいんだよね。選択肢がいっぱいあって不自由とかやっぱり言いたくないもん。まあ、昭和的な考えなのかな。

鳩山…一路さんは、スーパーサイヤ人だからね（笑）タモリは不自由だけど自由を追い求めている人だと思うんだよ。「料理と変態は創造行為」って書いていたけど、能動的に創造行為に自由なんだよね、私の中では。やっぱりそうありたい。99%がすこ

い不自由な、奴隷みたいな生活でもいいから、能動的なものをぶつ込みたいもんね。一路…分かる、分かる。

鳩山…本当に0から1を作り出すことって不可能というか、新しいものに思えても、過去の自分が見聞きした何かのつぎはぎだったりする。本当にそこに創造性があるの、と言われたら、そうですね…って感じだけど、少なくとも能動的ではあったと。

人生の中で夢を追うべきだったのかどうかとかなんか意味があるんだってというのは、その人自身も何度も折り返して考えていることで、本人が心から良かったと思えたら他人はそれを否定できないよね。本人だってそれがどうだったか分からないこともあるし、他人が評価することじゃないと思う。どの時点で考えるかっていうこともあるし、その人の問題だから他人は評価できない。だから、何というか、無意味と意味の間で何度も折り返すというか、自分の人生を自分の力で生きるといふか。自由ってそういう感じなのかと。

一路…なるほどね。話変わるけど、何か、能動的に見せかけられて受動的にさせられているとか、安易な表現行為で隠されてい

るとか、色々さん言ってきたけど、こーやって『創星』とか謎のフリーペーパー作って、こんな対談とかしている私たちこそ、何言っているんだって感じだね。

鳩山…そうだよ。本当にそうです。申し訳ないです。でも、とりあえず私は、素直に「何者か」になりたい自分を認めて、がんばりたいです。タモリの教えとは真逆の結論かもしれないけど（笑）

一路…あつ、そう（笑）

（終了）

第7回 天上の音楽を求めて・・・私の CD 放蕩記

そうか、こんな手があったのか！

その女性の歌うマーラー*1は、いわゆるクラシック音楽と言ひ難いものだった。しかし、そんな小賢しいジャンル分けを越えて、まさに「天上の歌」だった。

今回取り上げる曲： グスタフ・マーラー作曲 交響曲第4番 ト長調

マーラーの作曲した曲はみんなどこか奇妙だ。明るいところはとことん明るく、暗いところは地獄の底まで落ちていく。きれいな部分は本当にきれいだけど、時としてすさまじい風のように死の香りが漂う。そして、作品のほとんどは「死への恐怖」がしっかり裏打ちされている。つまり、「死ぬのはいやだ」とか「自分はこんなに不幸なんです」というメッセージが作中にでんと居座っている(本人は隠してるつもりかもしれない)。

正直、そんな作品を書いたマーラーさんとはお近づきになりたくないと思う。一方でマーラーは、人間的な音楽を作ったとも言える*2。それまで抽象的で乙に澄ましてきたクラシック音楽が、レベルを落とすことなく*3 普通の人間を描写するようになったほとんど最初の成功者である。

レベルを落とさなかったおかげで、マーラーの作品はやっぱり難解である。聴き慣れてしまえばなるほどと聴けてしまうけど、私が初めて聴いたマーラーは(よりによって超難解な交響曲7番だった)明確に明暗を判読しがたい音符の羅列。メロディーらしいメロディーも見つけられず、途方に暮れた音楽体験だった。よくあの訳の分からない曲を、ラジオで1時間以上も聞き続けたと思う。

そんな中で、この4作目の交響曲は例外的に聞きやすい。魅力的なメロディーが多く、また、死に対する大げさな嫌悪、恐怖感が少ないためだろう。2楽章こそ少々グロテスクだけど、カウベルの音に乗って始まる「メルヘンの世界へようこそ！」的な第1楽章、弦楽器が主体の甘く儂い第3楽章(最後の5分の美しいこと！)、そして「天国は楽しい！」と歌うソプラノ*3 独唱を伴う第4楽章からなっている。あの嫌世家マーラーが、一体何を考えてこんな幸せな曲を作曲したのか心配になってしまう。もし人から、マーラーは何から聴くのがいいか聞かれたら*4、真っ先にこの曲をお勧めする。

マーラーの名前を知ったばかりのころ、この4番ばかりを聴いていた。最初に買ったのはゲオルク・ショルティ*5という指揮者のCD。オーケストラの流れがなめらかで、よく言えば流麗、悪くいえば心に引っかかる場所がない。しばらくこのCDを聞き続けたが、残念ながらショルティは、音楽を快適にたやすことが得意な指揮者というイメージを固めるだけとなった*6。

それからしばらくして購入したのがクラウス・テンシュテット*7のCD。マーラーの悪魔的なイメージを強力に表現できる指揮者と聞き、期待して聴いてみた。確かにあの天国的な4番が、所々不穏な雰囲気感を漂わせる。しかし録音が悪い。このCDはEMIという会社から発売されている。そういえば、誰かが冗談で「EMIとは思えないくらい録音がいい」と書いていた。どうやら70年代EMI社の録音は、問題な録音が多らしい。

それから山田一雄*8 だとかミハエル・ギーレン*9 といった個性派指揮者の録音も聴いてみた。

前者はセカセカしたところもあるけど、真面目に演奏してる雰囲気は好印象。後者は素っ気ないところが徹底していて却って魅力的。印象的なのは3楽章で、乾いてるようで突然歌心あふれるメロディーが飛び出してくる。とはいえ、聴いてて何か変わるような演奏には思えなかったので手放してしまった。

これらのCDを聴くうちに、もう一つ気になることが出てきた。終楽章に出てくるソプラノ独唱である。どのCDを聴いても、その楽章が満足できない。オペラみたいな歌い方で、先の美しい3楽章とあまりに雰囲気が違って聞こえたり(別の曲を組み合わせたみたいだ)、ソプラノがオーケストラとうまくかみ合っていないように聞こえる。オペラみたいに聞こえるのは、録音された時代にはその歌唱法が普通だったかもしれないけど、今聴くとどうにもわざとらしく聞こえる。弦楽器主体の、あれほど透明な楽章を聴いた後でどうしてビブラートをかけまくった暑苦しい歌を聴かねばならないのだろう？一方で、独唱こそ透明な歌を披露していても、オーケストラと音のバランスのおかしなCDがいっぱいある。ギーレンの演奏など独唱とオーケストラを別々に録音したのではないかと疑ってしまう。

もちろん、私の感覚がおかしいのかもしれない。けれど、自分の感覚を信じなければ音楽を聴くことは出来ない。そこでさらにCDを買ったり演奏会に出かけたりした。

私の好きなヘルベルト・ケーゲル*10の演奏も素晴らしい演奏だった。1楽章から順に聴いていって、これなら無事4楽章も突破できる(?)かと期待したけど、当時の奥さんカサピエトラの歌は大時代的。現代音楽を得意とし、シャープな演奏でなるケーゲルは、その3楽章→4楽章の断絶にマーラーの本質を見たのだろうか？

名演奏という呼び声の高いレナード・バーンスタイン*11のCDも聴いてみた。1～3楽章は絶品。特に正規版でないウィーン・フィルとの演奏は3楽章がいい。優しく甘いメロディーに聴き惚れていると急に何かを抑えたような秘めやかなメロディーが現れてはっとする。残念なのはここでも終楽章。どういう意図があったのか分からないけど、ソプラノパートをボーイソプラノが歌っている。天使の歌だから、子どもを使ったのだろうか？そんな安易な発想ではないと思うけど、緊張のためか音を何度も外すその男の子の歌声にハラハラしてしまう*12。同じハラハラするならもっと音楽的なことでハラハラしたい*13。

思いあまって(?)オットー・クレンペラー*14という変人指揮者の演奏にも手を出してしまった。しかし、クレンペラーはやっぱり変人だという印象を強めただけで終わった。細かな細工のない無骨な演奏で、このこちんまりした曲が、やたらと巨大な曲に聞こえる迷演奏(感心している)。なのに、終楽章はベテラン歌手のシュワルツコップが、まるでオペラという余裕綽々の歌を歌い上げる。それが正しい歌唱法の時代なのだろう。

井上喜惟*15の演奏はオーケストラの一体感が凄い。どこもいいけど、録音がいいので3楽章がどれほどきれいな曲かがよく分かる。実際の演奏も聴いてみたけど、なんというか、痺れるような美しさだった。ただし、4楽章は(座った席が悪かったのかもしれないけど)今ひとつ。

デイヴィット・ジンマン*16の演奏は満点演奏。どの部分をとっても適切な演奏。しかし、この演奏を聴くと聞きやすいと思っていた4番にも、マーラーらしい押しつけがましさがあることが分かる。ジンマンの演奏にはそれがきわめて少ない。従って3楽章に切実に祈る気配が感じられず、最後に現れる独唱も物足りない。

もしかして、私の理想とする演奏、最高と思われる演奏は存在しないのだろうか？私の勝手な思い込みだろうか？

そんなときに出会ったのが冒頭の YouTube17*。ソプラノは森麻季*18。指揮はチョン・ミュンフン*19で、演奏は東京フィルハーモニー。クラシックというより童謡を歌う「歌のお姉さん」。表示される歌詞がかしこまった和訳でないのも童謡感を強める。もしかして、マーラーはこういう曲想を意図していたのではないか*20？

クラシック音楽というと、程度の差こそあれ、たいていの人間は高級で近づきたいイメージを抱くと思う。しかし、クラシック音楽は芸術である。「芸術作品」とは、まず何か伝えたいものがあり、それを伝えるための「手段」である。それを伝える手段として、芸術家は各々が得意とする方法で表現活動を行ってきた。作家なら小説で、クラシックの作曲家なら得意の音楽にするのだ。もし、高級な何かというイメージを伝えたいなら、やたらとゴージャスな曲を作ればいい。けれど、マーラーが表現したかったものはもっと軽やかで愉しげな、天界の情景ではないか？そうであるなら、この「歌のお姉さん」唱法は核心を突いている。例えクラシックの定法(例えばベルカント唱法)を外していても、聴くものに(演奏家が正しいと信じる)イメージを伝えられるなら、唱法なんて関係ない。

たった10分の4楽章だけど、夢のような10分である。是非聴いていただきたい。この天上の10分を求めて私は20年近くかけた。そしてそれは報われた。

追記

森麻季の歌うマーラー交響曲第4番は、YouTubeと同じキャストで、演奏も聴くことが出来た。しかし、曲の解釈が変わったか、録音のせい、良くあるオペラティックな歌を聴くこととなってしまった。残念である。

またその後、自分の理想に近いCDが2枚見つかった。一枚はクルト・ザンデルリンク*21が指揮したCD。協奏曲*22を得意とした指揮者だけあって、オーケストラと独唱者が一体化している。歌い方としてはオペラみたいな大げさな歌い方だけど、オーケストラが独唱者をしっかり支えているので、独唱者の浮き上がり感がない。その前の1～3楽章も立派な演奏で、もちろん、3楽章と4楽章がきれいに繋がっている。自分の理想と思う演奏が、自分の好きなザンデルリンク指揮の演奏で見つかってほっとした。

最近だと、ガリー・ベルティーニ*23という指揮者の(おそらく)最後の演奏がこの交響曲第4番が大発見。1楽章から夢の世界のツアーが始まる。2楽章もそんなに暗くならず、3楽章はただきれいなだけでなく生気があふれている。4楽章は歌手の歌をオーケストラがしっかり支える。最後の最後、演奏が終わってから長いこと拍手が起こらない。演奏会場で聴いていた人たちは、それだけの時間をかけないとあの幸せな夢から覚めなかったのではないか？

*1:グスタフ・マーラー(1860-1911):オーストラリア生まれの作曲家。音楽史でいうロマン派末期に、指揮者として活躍する一方、こつこつと作曲活動が続けてきた。作曲活動について、生前は趣味ぐらいに思われていたが、こんなに素晴らしい作品を書いていたのだ。

*2:人間的な音楽を作った作曲家はもちろん大勢いる。ほとんどは忘れ去られただけ。ただし、モーツァルト(1756-1791)は別。

*3:ここが大事なところ。単純に泣いたり笑ったりの描写では人を揺さぶることは難しい。

- *3:女性の高音パート。女性の低音パートはアルト。男性高音がテノールで、低音がバス(バリトン)。男性が女性高音を歌うのがカウンターテナー。
- *4:聞かれたことはまだない。
- *5:サー・ゲオルグ・ショルティ(1912-1997)。ハンガリー出身の指揮者。
- *6:とはいえ、ショルティは素晴らしい指揮者。ショルティの演奏で初めてその魅力を知った曲もある。晩年のチャイコフスキー交響曲第5番(ショルティは晩年まで「闘う」人だった)やブルックナー交響曲第2番(ショルティがこんなに歌謡的な演奏の出来る指揮者とは思わなかった)が面白い。
- *7:クラウス・テンシュテット(1926-1998)。ドイツ出身の指揮者。マーラー演奏を得意とする。強烈な演奏の出来る名指揮者。
- *8:山田一雄(1912-1991)。東京生まれ。音楽への熱気が全身からあふれ出すような指揮をする。演奏台から落ちたが、指揮をしながら戻ってきたエピソードは有名。日本で最初に、マーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」(初演時の演奏者数1000人超)を演奏した。
- *9:ミヒャエル・ギーレン(1927-)。ドイツ出身の指揮者、作曲家。現代音楽を得意とする。同じく現代音楽を得意とする?南西ドイツ放送交響楽団で音楽監督を務めた。
- *10:ヘルベルト・ケーゲル(1920-1990)。ドイツ出身で、主に東ドイツで活躍した指揮者。日本で人気があり、彼の指揮した素晴らしい演奏のCDは、故国ドイツより日本の方が入手しやすい。
- *11:レナード・バーンスタイン(1918-1990)。アメリカ出身の指揮者、作曲家。ユダヤ系のためか、若い頃からそれほど有名でなかったマーラーの作品を取り上げていた。
- *12:ハラハラしたい人向けの曲として、ドニゼッティのオペラ「ランメルモールのルチア」がある。その終盤に登場する「狂乱の場」がお勧め。最初はどいうてことのない曲だけど、後半、フルートと一緒に歌手が歌うところが圧巻。揺れやすい声が、音揺れの少ない楽器と一緒に歌うという超難曲。いい演奏は、(ライブに限るけど)誰が聴いても痺れる。
- *13:ボーイソプラノで成功しているのが、ミッシェル・コルボ指揮のフォーレ「レクイエム」(1972年)。さすがは声楽の専門家、時間をかけて丁寧に指導したのだろう、ボーイソプラノの歌う「ピエ・イエス」は「無垢な子ども」の見本のような見事な演奏。
- *14:オットー・クレンペラー(1885-1973)。現ポーランドに生まれたドイツ人指揮者。マーラーに師事していた。そのぶっきらぼうな演奏は、やがて巨大な音楽となる。現在人気上昇中。
- *15:井上喜惟(いのうえ ひさよし 1962-)。神奈川県出身。ジャパン・シンフォニアやジャパン・グスタフ・マーラー・オーケストラ(JMO)の音楽監督。年に数回、関東で素晴らしい演奏聴くことが出来る。
- *16:デイヴィット・ジンマン(1936-)。アメリカ生まれの指揮者。
- *17:<http://www.youtube.com/watch?v=KUHzFoAgGE>
- *18:森麻季:東京都出身のソプラノ歌手。
- *19:チョン・ミュンフン:韓国出身の指揮者。姉はチョン・キョンファという天才ヴァイオリニスト。この二人について、そのうち取り上げたい。
- *20:正解不正解はともかく、聴くものにそう思わせてしまうことが演奏家の力量。
- *21:クルト・ザンデルリンク(1912-2011)。ドイツ出身の指揮者。
- *22:ピアノやヴァイオリンといった楽器が歌手に相当するメインで、オーケストラはその伴奏をする音楽の形式。小中学校で、先生のピアノをバックに、人前で歌った経験が誰しもあると思う。そのクラシック音楽版。
- *23:ガリー・ベルティニーニ(1927-2005)。イスラエルの指揮者。

鈴

木

孝

道

の
苦
 一路 真実
 (いちろ まみ)

悩

鈴木孝道は、塀に背中を押しつけると、顔に光が当たらないように気をつけながら、通りの向こう側をそっと覗き見る。昨日の出来事なんてすっかり忘れてしまったかのような清々しい表情で、熊田さや子が自転車をこいで来るのが見えると、孝道は慌ててまた塀の陰に隠れる。自転車のブレーキ音があたりに響く。孝道は冷たいコンクリートに手をかけ、もう一度静かに顔を出す。

道すがらさや子にどのように謝ればいいのか、と孝道は悩んでいた。もちろん、さや子がこのカメダドラッグで働いていることは知っている。だが、今日の出勤時間が何時なのかは知らない。開店前から待ち伏せを始め、もし出勤途中のさや子と遭遇できたならば、その時に昨日のことを謝ろう。そう思い描き、さや子にかけ言葉は何度も胸で巡らせた。

足でリズムを刻むように、さや子がテナポよく自転車から降りるところを見届けると、今しかない孝道は通りに飛び出そうとした。店内で窓を拭いていた玉

井がさや子に気づいてふいに出てくる。孝道は慌てて、ぐっとつま先に力を入れて踏みとどまると、塀にもう一度身を寄せてしゃがみ、静かに覗き見る。

玉井のでつぶりとした腹に、カメダドラッグの赤いエプロンがびたりと張りついている。汗を手の甲で拭いながら、さや子と目が合うと、玉井は父親のように優しい目で微笑んだ。

ことの始まりは、孝道の十四も年の離れた妹が、友人の馬場空を孝道に紹介したことだった。その時、孝道はちょうど一人暮らしを始めると決めたばかりで、実家で段ボールに荷物を詰めている最中だった。妹の声を聞き、玄関に出た。

「お兄ちゃん、友達の空ちゃん」

ツンツンと一本ずつの髪が自立する程の短髪で、ソフト部で鍛えた筋肉質な体の妹に比べ、空は折れそうなぐらい華奢で、腰まであるゆるやかなウェーブの栗色の髪が印象的な女の子だった。

「はじめまして」

くねくねと揺れながらお辞儀をしたわりに、しつかりした声色が飛び出す。向き直った時にまっすぐ見つめたかと思えば、急に目を逸らしてはにかんだ笑顔をさせる。何だかどれもがアンバランスで、どこを切り取れば本当の姿が理解できるのだろうか、孝道は空に戸惑いを覚えた。

「ほら、お兄ちゃん。見とれてないで」

妹がいつものように軽口を叩きながら、部屋にあがる。続いて、空が孝道の隣を通り過ぎる時に見せた上目遣いが、制服を身にまとっていても高校生とは思えず、立ちすくんでしまった。

この出会い以来、時折妹の口から空の名を聞いていたものの、孝道が家を出てからはその存在をすっかり忘れていた。しかし、偶然にも、孝道のアパート前で再び空と会うことになった。

すれ違いに、突然声をかけられて孝道は驚いた。

「こんなところで会うなんて」

「うち、ここなんです」

空が差した建物は、孝道の住み始めた

アパートの向かいだった。

「俺の家、こっちだよ」

空は目を左右に泳がせて少し考えると、何かを思いついたように手のひらを合わせる。

「私の彼氏になつてもらえませんか？」

何を言いつ出すんだこの子は、と孝道は思った。唐突な申し出に、空を茫然と見つめる。

「いきなり、こんなこと頼んで申し訳ないんですけど……。最近、何だか男の人につけられてる気がするんです」

「ストーカーってこと？」

「彼氏がいることが分かれば、たぶんもう追いまわされないとと思うの」

孝道は顎に手を置き、少しだけ想像をめぐらせる。この言葉とふるまいの裏に一体どういう意味があるのか。相変わらずアンバランスな子だ。空のほんのり茶色

の大きな目を見ていると、何だか自分の中の男の性がむくむくと刺激される。その気持ちが抑えきれず、孝道は、俺も頼みがあるんだと切りだした。

「モデル？」

「そう、アートモデル。型を取るだけだから、じつとしてればすぐ終わるよ」

「そんなことで良いなら」

空は二つ返事でこの取引を承諾した。

孝道は、常に女性に囲まれて生きてきた。だから、男性、特に年の離れた大人の男性が家に存在すると、間違つて隣家に迷い込んだ猫のように、よそよそしい気持ちに胸がざわつく。

あの事件が起こったのは、孝道が中学生だった頃だ。その日、孝道は中学校から帰って来たばかりで、鍵を持っていない母親が何度もインターホンを連打するから、嫌な予感がしたのだ。

「姉ちゃん、開けてやって」

やり始めたゲームを停止させるのが嫌でそう叫んだものの、二人の姉が動く気配はない。しぶしぶ立ち上がると孝道はわざと足音を立てて玄関へ走った。

「鍵あるでしょ」

そう文句をつぶやいたが、母の様子が

何だかおかしい。すぐに中へ入ろうとせず、ドアの外で真っ赤なピンヒールに力を込めたかと思うと、突然叫んだ。

「早苗！ 美紀！」

その声に異変を察知すると、長女の早苗が急いで奥の部屋から出てきた。母がドアを大きく開くと同時に、隣に知らない男性が立っているのが目に入り、孝道は玄関に立ち尽くした。早苗は孝道の肩を後ろから掴んで、ひよいと顔を出すと、「こんにちは」とよそいきの声色で言った。姉の体重がかかった肩は、大きくなるだろうという推測で購入された、幅のひどく合っていない制服で包まれている。遅れて現れた美紀も、おずおずとお辞儀をしたが、孝道は黙って男を見つめたまま動けなかった。そんな孝道の横を年甲斐もなく派手な格好をした母が、「お茶を入れてあげなさい。あんたのお父さんになる人かもしれないから」なんて、ピンクの唇で耳打ちをして通り過ぎるものだから、耳から毛虫が入って背骨をぞわぞわと駆け抜けたかと孝道は錯覚した。

台所に立っていると、姉二人が近づいて言った。

「また、新しい人連れてきた」

「もしかして、四人目ができたんじゃないの？」

声を発しないまま口だけで「赤ちゃん」と言っただけで姉二人を無視して、急須にお湯を注いでいると、早苗が小声で囁く。

「だって、孝道のお父さん連れてきた時と同じ展開だよ」

それを聞いた美紀は、覚えてないと口をすぼめる。

母は、これまでに何度も見知らぬ男を家に連れてきた。たいていは勤め先のスナックの客で、仕事を終えた夜明け前に連れてくるのがほとんどだ。酔っ払っていて異様に声が大きく、子どもたちは全員目が覚めてしまうのだが、当の本人は子どもたちが自分のボーイフレンドのことに気づいているとは認識していないようで、愛の囁きを響かせ続ける。じつとしてそれを無視することが最後の親孝

行である、と孝道は思っていた。

男が玄関で靴を脱いでいる間に、母はいそいそとリビングを動き回る。テーブルの上にあった孝道のゲームソフトをおおざっぱにまとめて床におろすと、カーテンの中へぐいと押し込んだ。テレビの電源を切ると、ゲーム機のケーブルを迷うことなくぶちっと抜く。

「ゲームの方も電源があるっていつも言ってるじゃん。それで前も壊れたんだから」

孝道は言ったが、母は聞こえないふりをして、ティッシュ箱やリモコンを素早く部屋の隅に投げていく。そして、テーブルに物がなくなると、母はミニスカートを下に引っ張りながらソファに座り、足を組むとクッションを抱えた。

いけすかないスーツを着込んだ背の高い男性が、くぐるようにして部屋に入ってくる。普段は、男性の目を気にしない女子高のようなリビングなのに、一人増えただけで急に夜のお店のよう感じてくるから不思議だ。姉たちは、どう見て

も母と年齢の釣り合わないホストのような男の所作に見入っている。姉の間をすり抜けてテーブルに向かった孝道は、お茶を出すために雇われた使用人のようだとさえ思った。

我が物顔で男がソファに座ると、母は台所で呆けて立っている子どもたちに、床に座るよう手招きし、長い爪で端から順に指した。

「早苗が高校三年生。それから妹の美紀。この二人は年子で同じ父親」

孝道がそつとお茶を差しだす。

「この子は中学二年生で、姉二人とは違う父親。いわゆる異父姉弟ってやつ」

母はそう紹介すると、指を立てて自慢げに微笑んだ。

「だけど、孝道の父親とは籍入れてないから、離婚は一回だけなの」

男は母をちらっと見ると、ふんと相槌を入れ、胸ポケットから煙草を取り出した。母はつるつるしたジャケットのポケットからライターを出して火をつけ、目で孝道に合図を送る。孝道は食器棚の上

にある灰皿を取りに走り、テーブルに置いた。

「それで、実は」

母はうれしそうに両手で口元を隠しながら、三人の子どもをじつと見つめた。

「赤ちゃんができたの」

その瞬間、早苗はやっぱりねと言わんばかりに大きな溜息をついた。男は、白い煙を空中に大きくふかしてから言った。

「孝道くんのパパはどうしたの？」

孝道が固まったまま視線を送ると、母は不機嫌そうに答えた。

「知らないわよ。孝道が生まれるときにはもう出て行ってたんだから」

男はまた、へえと何でもないような声で言うと、孝道が持ってきた灰皿にとんとんと灰を落とした。

「言おうと思ってたんだけど、俺らも、入籍はとりあえずもうちょっと待とうぜ。お前も戸籍が汚れると嫌だろ」

母が男の腕を掴んだ。

「ちょっと待ってよ。何で別れること前提に話してんの」

男は煙草をくわえると、母の手を外しながら、肩に腕を回した。

「子どもがいるとは聞いてたけど、お前

三人もいるなんて言わなかったじゃん。一気に四人のパパなんてさ。お前、俺の

仕事分かってんだろ。既婚で子持ちなんてありえないの。そんなことに俺の人生

かけられないって」

「そんなことって、どういう意味？」

「なあ、孝道くん」

同意を求めするように、男が振り向いた。「孝道くんだって、そう思うだろ。パパ

のこと知らないんだもん」

笑顔で言われても思いながら、「はあ、まあ」と孝道がへらっと笑って曖昧な返

事をする、「あんたは黙ってなさい！」と、鬼のような顔をした母が怒鳴りつけ

た。男の片棒を担いだような気がして孝道が下を向くと、今度は今にも泣き出し

そうな表情を浮かべ、母がもう一度男に

くらいついた。「だって、あなたも結婚するって言ったでしょ。もう墮ろせる時期じゃないのよ」

もう一度、男の腕を掴んでたたみかける。

「こうやって、子どもたちにも会わせたいんだし。ね」

何度も、ね、と念押しする母を見てみると、一番悪いのはここにいます子ども三人なんじゃないか、と孝道は思う。過去に育んできた愛の産物がいなければ、母はお腹の子とこの男と一緒に暮らしているのかもしれない、と。

男は、また話し合おうと言いながら、駅まで送ると言う母を制止すると、そそくさと家を出て行った。ドアを閉めて落胆の表情を浮かべた母に対して、早苗は追い打ちをかけた。

「何なのよ！ 私たちに会わせたらからって何？ 墮ろせない時期まであいつに何も言わないって、子どもをネタに男を引き留めようとしただけじゃん。孝道の時と同じ」

指をさされて、孝道はまた固まる。美紀も黙っている。母が口を開こうとする、と、早苗は続けてまくしたてた。

「私も知らないからね。母さんが子どもを産んだって、絶対面倒なんて見ないんだから。私、高校卒業したらこの家を出て行く」

そう言い放つと、走って奥の部屋に入り、家が崩れるのではないかと思うほど、大きな音を立てて戸を閉めた。美紀も早苗を追いかける。肩を落として、何だか小さくなったような母を孝道は静かに見つめる。視線に気付くと、母は力なく笑った。

「早苗になんて、面倒見させないわよ。さあ、母さんもそろそろ仕事に行かなくちゃ」

そう言いながら、明るい赤茶色の髪をかきあげた。

あの事件があつてから、一カ月くらい経った頃だろうか。授業中、先生が黒板に向かっている隙に、前の席の男子が振り返り、孝道の机に二重丸を書いた。

「何するの」

孝道が言うと、男子は口真似して、

「何するの、だって。お前、女みたい」
中心線をさっと引き、丸の周りに点を打つ。

「これ、何のマーク？」

「お前の母ちゃんと姉ちゃんが持つてるものだよ」

にやにやしてそう言うと、先生に見つからないようにさっと前を向く。孝道はその印が何を示すか分からなかった。しかし、同級生のいやらしい笑い方からおそらく性的な何かだと直感し、黙って机の印を目にやきつけた。

放課後、同級生が孝道を追いかけて来て好奇の目を向けた。

「孝道の家って、母ちゃんと姉ちゃんしかいないんだよな。風呂とか一緒に入ったりすんの？」

「昔は入ってたけど、今は別だよ」

むっとしながら、孝道は答える。

「お前の母ちゃんも姉ちゃんもきれいだよな。裸も絶対エロいぞ」

「母ちゃん、今何歳だよ？ また子どもできたんだろ」

「お前、コンドームって言葉知らないんだろ」

孝道が何も言わないでいると、みんなの笑い声の中で、別の男子がまた茶化してくる。

「孝道、知らないんだぜ」

「今度、産むって覚えるよ」

「この前みんなで見えたエロ漫画の女に、孝道の母ちゃんの体つきって似てない？」

甲高く叫ばれた声に、本当だと同調しながら、みんながげらげら笑う。

孝道は、集団から離れようと大股で歩いた。同級生が母と姉を性の対象として見ていることに驚くと同時に、そうできない自分が何だか男として認められていないように感じた。自分の中の男の性が希薄であることを責められているようだった。孝道が何も言わないでいると、男子二人が後ろから早歩きで近づいた。

「女のおそこも見たことあんのかよ」

「あそこって……」

孝道が目を丸くすると、突然もう一人に肩を掴まれた。

「今日、机に描いてやっただろ」

「そうそう、孝道さあ。なかなか消さないから、掃除の時、女子に見つかりそうでひやひやしたよな」

一人がそう叫ぶと、後ろのみんなも孝道を囲み大笑いした。

姉二人は、高校を卒業すると相次いで家を出て行った。早苗が家を出るとすぐに、それまで母に逆らわなかった美紀も自分も家を出たいと言い始め、早苗のところにいくと言っては、時々外泊するようになった。

そうして姉二人が家を出て行った後、しばらく連絡をよこさなかった早苗が、成人式に出るから帰ると言ってきた。

「今でも仕事前の母さんの髪、巻いてあげてるんでしょ。子どもの頃から、毎日、姉の髪を結ってくれたのも孝道だったんだから、成人式の日も頼むよ」

女をふりかざして仕事をする母に嫌悪感を覚え、それに反発しながら生きる姉二人を見ながら、いつの間にかすべての

母性を一身に請け負っているのは孝道になつてた。

式の前夜、せっかく娘が帰って来たというのに、母は相変わらず店に出ている。

「やっぱり孝道になつているのね」

年の離れた異兄妹を寝かしつける孝道を見ながら、早苗は母に皮肉を言えなくて残念と言うように、そう呟いた。

「母さんも、今は昼の仕事をやめてるから、一応昼は母さんが面倒を見てるよ。夜は俺が世話してるけど」

早苗は母のウイスキーを勝手に開け、グラスに注ぐとぐびっと飲んだ。

「孝道は、将来どうすんの？ あの人と一緒にいたら、ずつと振りまわされるよ」

早苗がテーブルに両肘をつく。孝道は胸の上でトントン動かしていた手をゆっくり止めると、静かに立ち上がり、ふすまを閉めた。

「分かってる。俺ももう高校生なんだから。卒業したら、姉ちゃんたちみたいに、バイトしながら専門学校に通おうかなって思ってるよ」

孝道は、早苗の向かいに腰をおろす。

「明日、成人式が終わった後、家にいる？
会ってほしい人がいるの」

「彼氏？」

そう問うと、早苗はこくりと肯いた。

この家に男性は似合わない。早苗が連れてきた男を見て、孝道はそう思う。高校生にもなつて、もう知らない男を見て昔のように固まることはなくなつたけれど、家に見知らぬ男がいると違和感を覚える。バイト先で知り合ったと言いがながら、早苗が普段見せないような優しい表情を見せ、男にいつもと違う声色を使うと、孝道だけが疎外されているように感じた。たまれない気持ちになる。

男が帰って行った後、しきりに意見を求める早苗に、孝道は湯呑を洗いながら言った。

「美大生って感じのお洒落な人だったね」
すると、早苗は孝道の肩を揉んだ。

「さすが、弟よ」

笑つてそう言いながら、早苗の顔が斜

め下から出てくる。姉ちゃんってこんなに小さかつたつけ、と孝道は思う。その表情は孝道がよく知っているものだ。しかし、先ほどの男に見せる笑顔とは、少し違う。

この家では、男という性は外部から賄われるものだ。家の中には存在せず、誰かが外から持ち込んでくるもの。逆に、女という性が溢れている。孝道はずっとそう思つて生きてきた。しかし、外部の男に触れる度に、孝道にとつての女という生き物は、周りの男が感じるような性的な対象ではないのだと突きつけられる。女に対して、自分の男の性をふりかざしたいと思つていても、そうできない自分がいることを認めざるをえない。家の中に溢れている女という性と、求められる母という性を背負い、孝道は苦悩していた。孝道が自ら引いた家と外との境界線に、もどかしさを感じ続けていたのは孝道自身であった。

早苗が彼氏を連れてきたことで、余計に孝道はいらついていた。

「でも、何かあったら平気で人を裏切り
そんな目をしてる」

「そうかなあ。確かに絵を描いてる時は、
怖い目をしてるけど」

その言葉を聞いて、孝道は肩に乗せられた早苗の手をぐっと掴んで下ろした。

細くて冷たい手は、小さくて丸い妹のものとは違う、大人の女性の手だ。手をつたのはいつ以来だろうと孝道は思つた。

「モデルになることもあるの？」

「あるよ。裸婦像を描きたい時にね」

孝道の思いつめたような真剣な表情に、早苗は心配そうに目を覗きこむ。

「どうしたの？」

「お願いがあるんだ」

孝道が言うと、早苗は肯く。

「俺にも、モデルになつてくれないか」

暗闇の中で、鉛筆の動く音がする。赤い光で照らされた早苗が、開脚したまま下半身をさらけ出して座っている。孝道はそれを見ながら黙つて鉛筆を走らせる。「本当は型が取りたいんだ。男性が憧れ

る女性器を自分の手で作りたい」

孝道は低い声で早苗に言った。

「特殊メイクの専門学校に行つて、技術を身につけたら、誰もが触れてみたいと思ふような女性器の作品を生み出すんだ」

「孝道がそんなに夢中になつてゐる姿、初めて見た」

早苗の声に、孝道は紙から鉛筆を離すと、黙つて視線を上げた。

「……触つてみる？」

早苗はそう言つて、強い眼差しを孝道に向けた。

「ひやつとする」

そう言いながら、空は笑い声をあげる。孝道との取引でアートモデルを引き受けた空は、制服のスカートモデルを脱ぎ捨て、樹脂粘土を流し込んだ洗面器の上に座つた。「この型をどこかで売る気なの？」

孝道は首を振つた。

「これは芸術作品なんだよ。俺より女性器をうまく作れるやつはいない。売るとしたら、この技術かな」

「孝道さんつて、介護の仕事してるんでしょ？」

空が首をかしげると、バランスを崩して洗面器から体が離れそうになつた。

「動かないで」

「ごめん」

空はまたにやにやと笑う。孝道はふうと溜息をつく。

「特殊メイクの学校で技術を学んだんだけど仕事がなく、もう一度別の学校に通つて介護の資格を取つた。結局は学費が思ったより高くて、その間ずっと実家から出られなかった。やつと生活も安定してきたから家を出たんだ。今は高齢者の世話をしてるけど、いつか俺の才能とこの芸術作品が世間に認められるはずなんだ」

ふうんと曖昧に息を漏らした空は、長い髪を手で横に束ねながら、そつけない問いかける。

「もつとたくさん女のあそこの模型を作りたいの？」

孝道は向かいの椅子に腰かけ、足を組

んだ。空が見つめてくる。女子高生らしくくない、いやらしく孝道を引き寄せるような大人の女の目だ。

「たくさん作りたいよ」

そう言いながら、孝道は肯く。

「俺にとつて、女性器の模型を作ること、は、みんなから男として見てもらう一つの方法だから」

すると、洗面器にまたがつたまま、空はふつくりとした唇をかすかに開けた。

「来て」

孝道は洗面器を揺らさないように気をつけながら、空が乗っているベッドに片膝をついた。空は孝道の肩に両手をかけて、引き寄せる。洗面器に入った粘土が少しずつ固まっていくなか、空は唇を重ねる。孝道の柔らかく湿つた舌をゆつくりと舐めとつていく。

それからというものの、孝道は空と何度も逢瀬を重ねた。孝道の部屋には、空の性器の模型がどんどん増えていく。空だけではない。孝道に好意のある女性にいろいろなる形で依頼しながら、女性器の模

型をいくつも並べた。

空のストーカーがカメダドラッグの店長であることが分かると、孝道は空に言った。

「訪問介護に行く家の近くに、カメダドラッグがあるんだ。その店長だよ、あの男」

空は孝道の腕から頭を離し、大きな目を開いて見つめた。

「本当？」

「確かめてみれば」

空が首を縦にふると、甘いバニラの匂いが髪から香った。

その後、空はカメダドラッグの前でアルバイト募集の貼り紙を見つけると、何を思ったのかそこで働き始めた。そのことを空に訊ねると、柔らかな長い髪を耳にかけながら、きやははと短く笑う。

「ストーカーを逆に誘惑して、セクハラでクビにする。復讐計画なの」

カメダドラッグで働くようになってからというもの、少しずつ孝道と距離を取っているように感じる。空は、他に夢中

になれるものを見つけたようだ。

「今日、型を取ってもいい？」

孝道が訊ねると、空はやんわりと拒否した。

「そうそう。バイト先で、孝道さんのこと気になってるって人見つけたの。モデルになってもらえば？ 話してみるよ」

空に言われたとおりに、営業時間が終わる頃に孝道が車で待っていると、カメダドラッグから熊田さや子がいそいそと出て来て、助手席に乗った。

「アートモデルって聞いたんですけど」

「そう。型を取るだけなんだけどね。じつとしてればすぐ終わるから」

孝道がにこりと笑うと、さや子は頬を赤らめ、両腕の中にある鞆をぎゅっと抱きしめた。

「ごめんね。あまりお金もないから、アトリエは持ってないんだ」

孝道が家に入ると、さや子は後ろから自然とついてきた。孝道はベッド脇にあった緑色のライトを点けた。薄暗い部屋

の中で、そのライトに反応するように部屋のあちらこちらがぼんやりと光る。真つ暗な世界の中で、光が道標となって歩む方向を示している。さや子はその光つたものに近づくと、影になっている溝部分をそつとなぞった。

「きれいでしょ？」

孝道が後ろから囁くと、暗くてもさや子の頬が赤くなっていることが分かる。鼓動が聞こえてきそうだと孝道は思う。

「これって……」

孝道はそつとさや子の両肩に触れた。びくんと痙攣したのが伝わる。

「女性器の石膏像だよ。俺のコレクション」

「アートモデルって、もしかしてこれ？」

「そう。今触ったのは空の性器だよ」
肩に乗せた手を通して、さや子が動かなくなったのが分かる。

「女性器はね、人によって形が違うけど、同じ人でもその時々で変わっていくんだ。

空は何度も取らせてくれたから、いろいろな形があるよ。食事をした後、睡魔と

開っている時、悲しいことがあった夜。

それから、セックスしたかどうか」

さや子をそっと胸に抱き、孝道はライトに発光する石膏像を手にとって説明していく。そのうちにさや子の目がとろんとしてきたので、孝道はベッドに横たわらせた。虚ろな視線は合っているようで、どこか交わらない違和感がある。ブラウスのボタンに指をかけると、おとなしかったさや子が突然暴れ出した。さや子は叫びながら、孝道を通して別の人物を見ているようだ。

「やめて、お父さん！」

「……どうしたの、さや子ちゃん」

優しい声で囁きながら、さや子を抱きしめようとすると、さや子は孝道の胸を強く押した。

「助けて！」

叫び声と同時に、玄関から大きな音がして、丸く太った中年男性が転がりこんでくる。孝道は立ち上がり、玄関へ向かうとする。太った男性の後ろからひろひろひよろした青年が走り込んできた。

ペアで見て、ようやく二人がカメラドラッグの店員と薬剤師だと分かった。孝道は、思わずディスプレイしてあった女性器の石膏を手に取り投げつけた。青年の肩に命中し、うっと呻き声をあげる。その瞬間、さや子が後ろから走ってきて、孝道を突き飛ばす。よろめくと、さや子は青年の胸に飛びこむ。二人は走って玄関を出て行こうとする。

「待て！」

孝道が追いかけてようとすると、突進してきた丸い中年男に押し戻され、そのまま倒れ込んだ。同時に、ベッドの角で思い切り後頭部を打ちつけ、男に上から体が圧迫された。目の前にチカチカと火花が散る。湿った体の中年男がはあはあと荒い息を整えながら、重しのように乗っている。孝道に覆いかぶさった男は、息を切らしながら丁寧に挨拶をした。

「玉井康裕と申します」

孝道は頭の端でぼんやりと、玉井という名字がこれほど似合う人はいないと思っていた。

「ちょっと不安になったもので、ついて来ちゃいました」

玉井は照れながら、ぷっくりとした手の指で丸い眼鏡を上げる。

「……おっ、重い……」

孝道の声によりやく玉井は体を外す。血流が体にめぐり始めたのを感じるが、孝道は立ち上がれないままのびている。

すると、玉井が言った。

「人生って、辛いことも楽しいことも両方起こるから良い、って気がしませんか」

シャツの袖をまくり上げながら、玉井はあぐらをかいた。玉井の丸々と太った顔を床から見上げる。どこからどこまでが顔なんだろう。そんなことを考えながら、孝道は玉井のことを見ていた。

「私なんて、カメラドラッグの本社で定年退職したかと思ったら、再雇用でいきなり店舗にいかされたんですよ」

店でよく玉井の姿を見かけたことを思い出す。ほとんど客はいないのに、どの店員よりも大きな声を出し、無駄に動き回る姿だ。孝道は、鈍痛のする後頭部か

ら声を絞り出した。

「ああ、……はい」

頼んでもいないのに、大人用の紙おむつ製品の違いを詳細に説明してきた玉井の姿も思い出した。

「女房には子どものバイト代と同じ給料なんて罵られてね。でも、どうせ人生には辛いことが起こるんだったら、辛いと思つたときほど楽しい思い出が残るように努力すべきだって気づいたんです。そうしたら、それは楽しいことになると思いませんか」

口を開けたが、喉から声が出てこない。

「後から、楽しかったこともあったなと思えるように。一つでいいから、楽しい思い出を同時に抱えるべきなんです」

孝道の返事を待たないまま、玉井は息が整うと立ち上がった。

「では、お邪魔しました」

どしどしと床を軋ませながら進み、玄関口で振り返る。

「もし、あなたが今日辛いと思つたなら、明日カメダドラッグに謝りに来てくださ

い。今日のことをあなたの良い思い出に変えましょう」

にこりと笑つた玉井の眼鏡はカーテンの隙間から入つた細い光にきらりと反射し、ぶにっつと皺の寄つた顎が首との境目を主張していた。

次の日の朝、カメダドラッグの向かいの扉に、まさか孝道が隠れているとは思ひもよらず、さや子は自転車から降りると店舗から出てきた玉井に挨拶をした。

「おはようございます」

さや子が頭を下げると、ぞうきんを握りしめた玉井は大きな声で言つた。

「おかえりなさい」

玉井が丸い顔いっぱい笑うと、顎に何重もの皺ができる。その表情につられて、さや子も恥ずかしそうに笑うと、玉井の横をすりぬけて店に入つて行つた。

孝道はあつと思わず立ち上がったが、玉井も体に似合わない軽やかさで、孝道に気づかぬまま中へ入ってしまった。

店内に差し込む朝陽が、所狭しと並べ

られた商品のパッケージに反射し、何だか店全体が煌めいているように見える。その光はまるでさや子を温かく包みこんでいく檻のようで、孝道は拳を握りしめたまま、しばらく店内を覗き見ていた。さや子の姿が見えなくなつてもなお、玉井の「おかえりなさい」という言葉を頭の中で何度も繰り返しながら、家から閉め出された子どものように、孝道は店の中をじつと見つめて佇んでいるのだった。

(了)

あとがき

この作品は、玉井とマヤ子を中心とした物語（長編「カメダドラッグ」）を書いた際に、悪者役だった孝道にも物語があるはずだと思い、スピンオフとして書きました。まあ、作者の自己満足ってやつですけどね。

いちろまみ

※この小説は、実際の事件を発想の発端にしていますが、フィクションであり事実とは異なります。

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまよこくっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人に
とって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているんだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりで考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STAR DUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



一路真実

文鳥、飼いはじめました。取り出したエサ箱に私がエサを入れようとして、リビングで思わずびっくり返し、「ゲッ!」と言ったら、鳥から「チチッ!」(俺のエサだぞ!)とお叱りを受けました。ミドリガメのときよりコミュニケーションがとやすいです。



To's jpb

最近、興味があること
重力 抗力 中心軸
地球が回転していること。



鳩山豆子

今回もまた沢山の人の参加してもらって『創星9号』ができました。感謝。



しなおかななし

先日本当に久し振りに、母に花を贈りました。
むかでのように何足もわらじを履く生活が続いていますが、一つずつきちんと外せるよう、精一杯努めます。



詠人不知

科学に頼らず、
細胞は鍛えるもの。



天沼太郎

今回、演奏会から離れてCDの話と
なってしまいました。発展したの
か? 日和ったのか?!
mailto:doguranagura71@gmail.com



馬場貴生

創作は意味や整合性との戦いですが、本当はとことん意味を排除したいのです。タモリファンです。



坪井希

今回が初参加です。カラオケ、飲み屋、スポーツジムと本屋が主な生息地です。よろしく願いいたします。



マチコ・リバーウォーク

御年80歳にしていまだ現役でバリバリ描いていらっしゃる藤子不二雄A先生。連載中の「PARマンの情熱的な日々」をいつも楽しみにしています。大ファンです。



メンバー募集!

あなた

星屑書房について & メンバー募集!!

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。
現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。
本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。
映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。
社会人が中心ですが、誰でも入会OK! 「こんな活動してみたい!」という提案募集中心☆
少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください! →→→ stardustbooks@live.jp
お待ちしております!

創星 第9号

2014年5月18日 初版

発行元 星屑書房

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

©2014 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

Stardust Books

<http://stardustbooks.soragoto.net>